# 印旛村六反目遺跡・広台遺跡・際作遺跡

―住宅市街地基盤整備(県道263号八千代宗像線埋蔵文化財調査)―

平成21年3月

千葉県県土整備部

財団法人　千葉県教育振興財団

# 印旛村六反目遺跡・広台遺跡・際作遺跡

―住宅市街地基盤整備(県道263号八千代宗像線埋蔵文化財調査)―

# 序　文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告書第617集として、千葉県印旛地域整備センターの住宅市街地基盤整備に伴って実施した六反目遺跡、広台遺跡、際作遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

広台遺跡の調査で、縄文時代の炉穴から大量の海産貝殻が見つかりました。これらの貝は、一般に海で採取されるものでした。この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また郷土史の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成21年３月

財団法人　千葉県教育振興財団

理事長　福　島　義　弘

# 凡　例

1　本書は、千葉県印旛地域整備センターによる住宅市街地基盤整備（県道263号八千代宗像線）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書は、下記の遺跡を収録したものである。

六反目遺跡　千葉県印旛郡印旛村岩戸字西田2971－3ほか（遺跡コード325－008）

広台遺跡　千葉県印旛郡印旛村岩戸字広台3847－6ほか（遺跡コード325－009）

際作遺跡　千葉県印旛郡印旛村岩戸字木戸尻3247－6ほか（遺跡コード325－007）

3　発掘調査から報告書作成に到る業務は、千葉県印旛地域整備センターの委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者と実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆は、上席研究員　森本和男が行なった。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県印旛地域整備センター、印旛村教育委員会の御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

国土地理院発行　1/25,000地形図「小林」(N－54－19－14－1)

印旛村役場発行　1/2,500「印旛村都市計画図」9、14、15

8　遺跡周辺航空写真は、京葉測量株式会社による1967年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。座標系は旧日本測地系を用いている。

10　本書で使用したスクリーントーン及び記号の用例は、挿図中に記した。

# 本文目次

第1章　はじめに……1
　第1節　調査の概要……1
　　1　調査の経緯と経過……1
　　2　調査方法と成果の概要……3
　第2節　遺跡の位置と環境……11
　　1　地理的環境……11
　　2　歴史的環境……11
第2章　六反目遺跡……23
　第1節　弥生時代……24
　第2節　中近世……25
　　1　竪穴状遺構……25
　　2　土坑……27
　　3　溝……28
　　4　塚……32
第3章　広台遺跡……37
　第1節　縄文時代……37
　　1　炉穴……37
　　2　土坑……37
　　3　遺物包含層……39
　　4　出土遺物……40
　　5　貝層……44
　第2節　平安時代……50
　　1　住居跡……50
　　2　遺物包含層……54
第4章　まとめ……56
報告書抄録……巻末

# 挿図目次


第1図　際作遺跡、六反目遺跡、広台遺跡の位置図……2
第2図　際作遺跡の確認調査……3
第3図　六反目遺跡のグリッド設定図……4
第4図　六反目遺跡の上層確認調査……5
第5図　六反目遺跡の下層確認調査……6
第6図　広台遺跡のグリッド設定図……7
第7図　広台遺跡の上層確認調査……8
第8図　広台遺跡の下層確認調査……9
第9図　周辺遺跡（旧石器時代）……12
第10図　周辺遺跡（縄文時代）……13
第11図　周辺遺跡（弥生時代）……15
第12図　周辺遺跡（古墳時代）……17
第13図　周辺遺跡（奈良・平安時代）……18
第14図　周辺遺跡（中近世）……19
第15図　六反目遺跡の遺構分布図……22
第16図　001住居跡……23
第17図　001住居跡出土遺物……24
第18図　002竪穴状遺構……25
第19図　004・005・006土坑……26
第20図　007・008土坑……27
第21図　010・011溝……29
第22図　012・016溝……30
第23図　002・003竪穴状遺構、013・014・015溝……31
第24図　009塚……33
第25図　009塚土層断面図……34
第26図　六反目遺跡出土遺物……35
第27図　広台遺跡と周辺の地形……36
第28図　広台遺跡の遺構分布図……38
第29図　006・008炉穴、005土坑……39
第30図　007土坑……40
第31図　縄文土器（1）……41
第32図　縄文土器（2）……42
第33図　縄文土器（3）……43
第34図　縄文時代の石器（1）……44
第35図　縄文時代の石器（2）……45
第36図　貝殻重量比……47
第37図　ハイガイの殻長……49
第38図　001住居跡……50
第39図　002住居跡……51
第40図　003・004住居跡……52
第41図　住居跡出土の土器……53
第42図　平安時代の土器……54


# 表目次


第1表　新旧遺構番号の対照表……10
第2表　周辺遺跡（旧石器時代）……11
第3表　周辺遺跡（縄文時代）……14
第4表　周辺遺跡（弥生時代）……16
第5表　周辺遺跡（古墳時代）……20
第6表　周辺遺跡（奈良・平安時代）……21
第7表　周辺遺跡（中近世）……21
第8表　広台遺跡の石器一覧表……43
第9表　A1の種類別貝殻重量……46
第10表　A2の種類別貝殻重量……46
第11表　貝殻の重量と比率……47
第12表　二枚貝の大きさ……49
第13表　広台遺跡の平安時代土器一覧表……55

# 図版目次


図版1　遺跡周辺航空写真（1967年）
図版2　際作遺跡調査前風景、調査風景、
　　六反目遺跡調査前風景
図版3　001住居跡、002竪穴状遺構、004土坑
図版4　004土坑と010溝、005土坑、006土坑
図版5　007土坑、008土坑、011溝
図版6　010・011溝、012・016溝、013・015溝
図版7　012溝、013・014・015溝、009塚調査前
図版8　009塚北西から、北東から、底部土坑
図版9　広台遺跡遠景、006炉穴貝層、出土状態
図版10　006炉穴、土層断面、008炉穴
図版11　007土坑、縄文時代遺物包含層
図版12　001住居跡、遺物出土状態、カマド、
　　002住居跡
図版13　003・004住居跡、平安時代遺物包含層
図版14　六反目遺跡001住居跡遺物、
　　六反目遺跡遺物縄文土器
図版15　広台遺跡縄文土器
図版16　広台遺跡縄文土器、広台遺跡石器、
　　六反目遺跡遺物
図版17　六反目遺跡009塚遺物、
　　広台遺跡住居跡遺物
図版18　広台遺跡遺物、006炉穴貝殻

# 第1章　はじめに

## 第1節　調査の概要

### 1　調査の経緯と経過

県道263号八千代宗像線は、主要地方道である県道4号千葉竜ヶ崎線と、同じく主要地方道の県道64号千葉臼井印西線を結ぶ道路で、千葉ニュータウンの南側をほぼ東西に走っている。住宅市街地基盤整備委託による県道八千代宗像線の道路工事に当たり、千葉県印旛地域整備センターは、千葉県教育委員会へ路線内に所在する埋蔵文化財の所在有無の照会を行なった。現地踏査の結果、路線内に六反目遺跡、広台遺跡、際作遺跡が所在することが確認された。県教育委員会は、県印旛地域整備センターと埋蔵文化財の取扱について協議し、記録保存を請ずることとなった。

発掘調査は、財団法人千葉県教育振興財団が実施することとなり、以下のとおりに六反目遺跡、広台遺跡、際作遺跡北半分の現地調査を平成18年7月から12月まで行ない、残りの際作遺跡南半分の調査を平成19年9月に行なった。3遺跡の整理作業を平成20年7月から11月まで行なった。

発掘調査

六反目遺跡

平成18年度　調査面積4,200㎡、調査期間　平成18年7月3日～10月13日
調査研究部長　矢戸三男　　北部調査事務所長　古内茂
担当職員　上席研究員　田井知二

広台遺跡

平成18年度　調査面積2,100㎡、調査期間　平成18年10月16日～12月8日
調査研究部長　矢戸三男　　北部調査事務所長　古内茂
担当職員　上席研究員　田井知二

際作遺跡

平成18年度　調査面積780㎡、調査期間　平成18年12月11日～12月18日
調査研究部長　矢戸三男　　北部調査事務所長　古内茂
担当職員　田井知二

平成19年度　調査面積1,020㎡、調査期間　平成19年9月3日～9月14日
調査研究部長　大原正義　　北部調査事務所長　豊田佳伸
担当職員　上席研究員　沖松信隆

整理

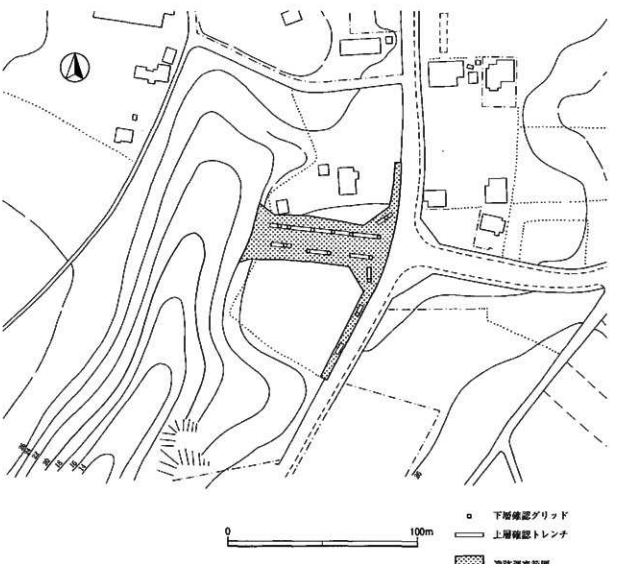
平成20年度　整理期間　平成20年7月1日～11月28日
調査研究部長　大原正義　　北部調査事務所長　豊田佳伸
担当職員　上席研究員　森本和男

第1図　際作遺跡、六反目遺跡、広台遺跡の位置図 (1/5,000)

## 2　調査方法と成果の概要

県道263号八千代宗像線の起点は、県道４号千葉竜ヶ崎線との交点である下宿交差点で、現在の終点は、県道64号千葉臼井印西線との交点である岩戸交差点である。印旛地域整備センターの工事計画によると、印旛沼西端の新川にかかる阿宗橋付近を起点にして、吉田集落南側を通って東北へ、終点を現在の岩戸交差点から北側約1.5kmの並木付近につけ替え、印旛沼西端から吉田と岩戸の集落を通らないバイパス道路が造られることになった。六反目遺跡、広台遺跡、際作遺跡は、この新しく造られる西南から東北へのびる道路予定地に所在していた。際作遺跡は、西側の終点となる交差点部分にあり、広台遺跡は西南の丘陵端部、六反目遺跡は、その中間の丘陵中央に位置する（第１図）。

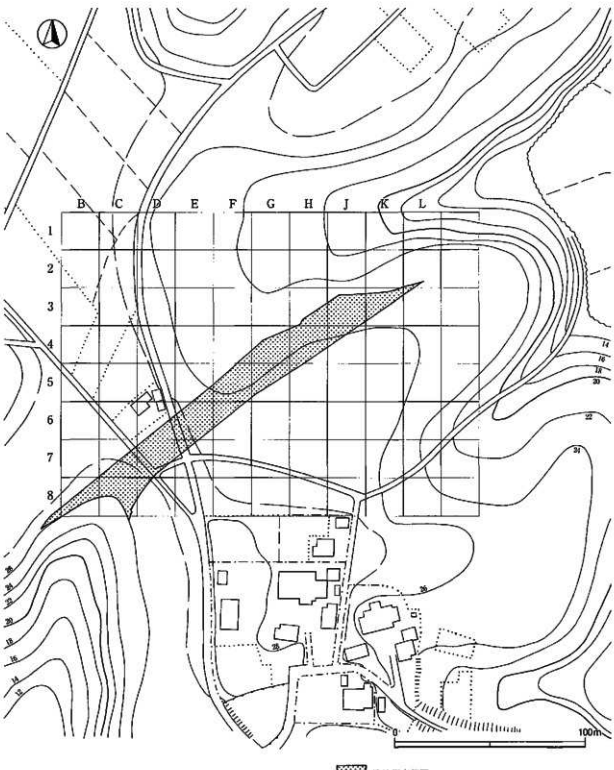
**際作遺跡**　際作遺跡の発掘は、平成18年度と平成19年度の２次に分けて行ない、交差点となる西側部分の計1,800㎡を調査した。調査方法は、国土地理院の国土座標を基準に20mの大グリッドを設定し、確認調査を実施した。上層の確認調査は、調査面積の約10％に相当する面積に、幅２mのトレンチを設定して、深さ約0.3m掘り下げた。下層の確認調査は、調査面積の約２％に相当する面積に、大きさ２×２mの正方形のグリッドを設定し、深さ約1.8mまで掘り下げた（第２図）。




第２図　際作遺跡の確認調査（1/2,000）

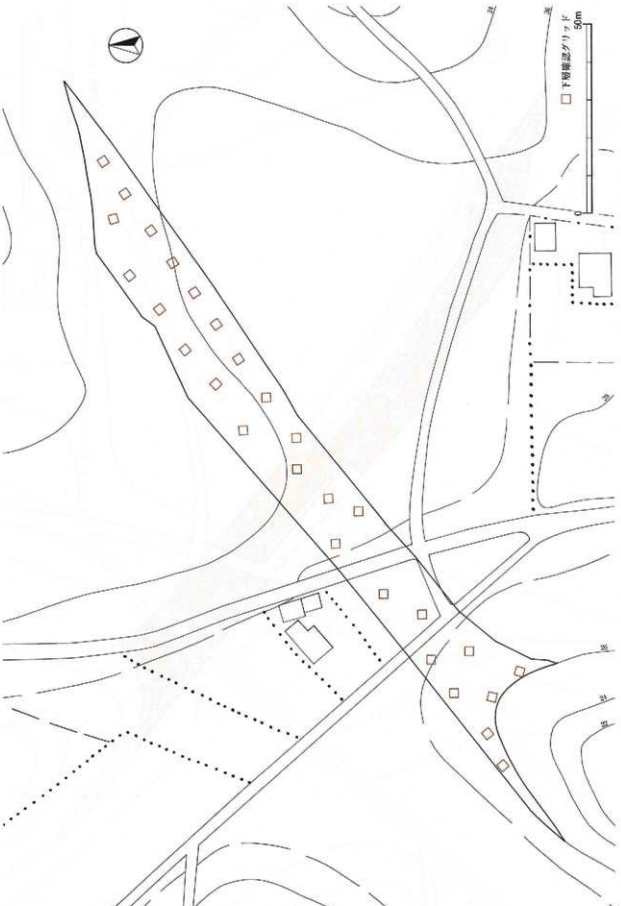
上層および下層の確認調査の結果、遺構、遺物は検出されず、確認調査で終了した。

交差点をはさんだ道路東側部分を、平成３年度に印旛郡市文化財センターが調査をしている。その時も遺構は検出されなかったが、縄文土器５点と頁岩製剥片１点が出土した。さらに道路にそって東側に隣接する古谷遺跡からは、古墳時代の住居跡が３軒検出された[1]。




第３図　六反目遺跡のグリッド設定図 (1/2,000)

第4図　六反目遺跡の上層確認調査 (1/1,000)



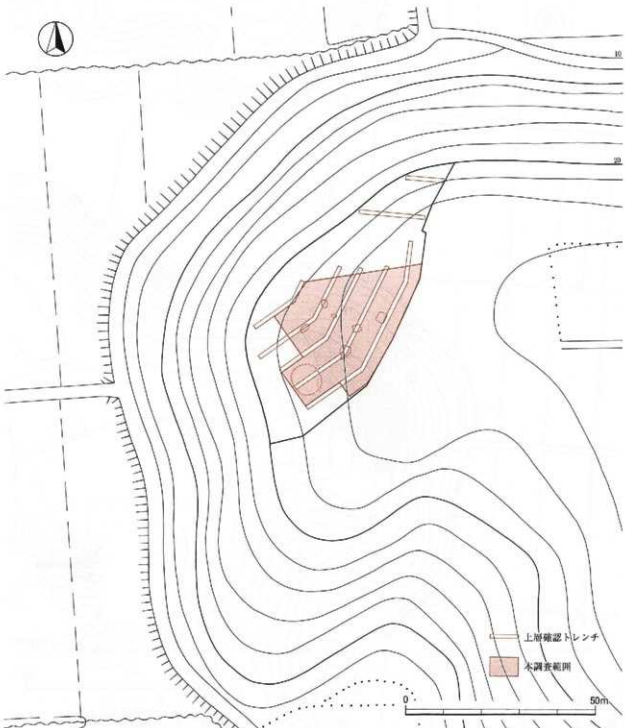

第5図　六反目遺跡の下層確認調査 (1/1,000)

**六反目遺跡**　六反目遺跡は際作遺跡の西南約800m、郷田地区の北端に位置している。遺跡周辺には山林と墓地が広がっていた。調査した範囲は台地上の細長い道路予定地で、面積は4,200㎡であった。際作遺跡と同様に、20mの大グリッドを設定し（第３図）、確認調査を実施した。上層の確認調査は、調査面積の約10％に相当する面積に、幅２mのトレンチを設定して、深さ約0.3m掘り下げた。確認調査の結果、

第６図　広台遺跡のグリッド設定図 (1/2,000)

弥生時代の住居跡１軒、土坑３基、中近世の竪穴状遺構２基、土坑３基、溝５条、塚１基が検出された。中近世の遺構を中心に2,370㎡の本調査範囲を設定して、本調査に移行した（第４図）。

下層の確認調査は、調査面積の約３％に相当する面積に、大きさ２×２ｍの正方形のグリッドを設定し、深さ約1.8ｍまで掘り下げた（第５図）。下層の確認調査で旧石器時代の石器は出土しなかったので、確認調査で終了した。




第７図　広台遺跡の上層確認調査（1/1,000）

**広台遺跡**　広台遺跡は六反目遺跡の西南約500mに位置し、調査したのは台地先端部分であった。

広台遺跡の南側約250mの同じ台地に運動公園がある。この運動公園にはかつて岩戸広台遺跡A地区があり、1984年（昭和59）に印旛郡市文化財センターによって調査された。調査の結果、縄文時代の住居跡、土坑、炉穴、古墳時代から平安時代にかけての住居跡が検出された。また広台遺跡の東南150mの台地上には岩戸広台遺跡B地区があり、同年に同じく印旛郡市文化財センターによって調査された。調査の結果、

第8図　広台遺跡の下層確認調査 (1/1,000)

縄文時代の炉穴、土坑、古墳時代から平安時代にかけての住居跡が検出され、A地区と同じような成果が得られた。周辺の台地上にはさらに遺構が連続して存在したと予想されたが、残念ながら調査されずに開発によって消滅してしまった[7]。遺跡は台地上全面の広範囲におよんでいたと予測される。

今回調査した部分は台地西北端部であった。調査面積は2,100㎡で、本遺跡でも、20mの大グリッドを設定し（第6図）、確認調査を実施した。上層の確認調査は、調査面積の約10％に相当する面積に、幅2mのトレンチを設定して、深さ約0.4m掘り下げた。確認調査の結果、縄文時代の炉穴4基、土坑1基、貝層1地点、奈良・平安時代の住居跡2軒、土器集積遺構1基が検出された。検出された遺構を中心に850㎡の本調査範囲を設定して、本調査に移行した（第7図）

下層の確認調査は、調査面積の約3％に相当する面積に、大きさ2×2mの正方形のグリッドを設定し、深さ約1.8mまで掘り下げた（第8図）。下層の確認調査で旧石器時代の石器が検出されなかったので、確認調査で終了した。

**遺構番号**　調査で検出された遺構には、現地で随時それぞれに遺構番号を付していった。整理作業の段階で新たに番号を付すとともに、明らかに撹乱や木の根と誤認された遺構については欠番とした（第1表）。

第1表　新旧遺構番号の対照表

| | 旧番号 | 新番号 | 種　別 | 時　代 |
|---|---|---|---|---|
| 六反目遺跡 | SI001 | 001 | 住居跡 | 弥生時代 |
| | SI002 | | 竪穴遺構（欠番） | |
| | SI003 | 002 | 竪穴遺構 | 中近世 |
| | SI004 | 003 | 竪穴遺構 | 中近世 |
| | SK001 | | 土坑（欠番） | |
| | SK002 | | 土坑（欠番） | |
| | SK003 | 004 | 土坑 | 中近世 |
| | SK004 | | 土坑（欠番） | |
| | SK005 | | 土坑（欠番） | |
| | SK006 | 005 | 土坑 | 中近世 |
| | SK007 | 006 | 土坑 | 中近世 |
| | SK008 | | 土坑（欠番） | |
| | SK009 | 007 | 土坑 | 中近世 |
| | SK010 | 008 | 土坑 | 中近世 |
| | SK011 | | 土坑（欠番） | |
| | SK012 | | 土坑（欠番） | |
| | SM001 | 009 | 塚 | 近世 |
| | SD001 | 010 | 溝 | 中近世 |
| | SD002 | 011 | 溝 | 中近世 |
| | SD003 | | 溝（欠番） | |
| | SD004 | 012 | 溝 | 中近世 |
| | SD005 | | 溝（欠番） | |
| | SD006 | 013 | 溝 | 中近世 |
| | SD007 | 014 | 溝 | 中近世 |
| | SD008 | 015 | 溝 | 中近世 |
| | SD009 | 016 | 溝 | 中近世 |

| | 旧番号 | 新番号 | 種　別 | 時　代 |
|---|---|---|---|---|
| 山内遺跡 | SI001 | 001 | 住居跡 | 平安時代 |
| | SI002 | 002 | 住居跡 | 平安時代 |
| | SI003 | 003 | 住居跡 | 平安時代 |
| | SI004 | 004 | 住居跡 | 平安時代 |
| | SK001 | | 土坑（欠番） | |
| | SK002 | 005 | 土坑 | 縄文時代 |
| | SK003 | 006 | 炉穴 | 縄文時代 |
| | SK004 | 007 | 土坑 | 縄文時代 |
| | SK005 | | 土坑（欠番） | |
| | SK006 | 008 | 炉穴 | 縄文時代 |
| | SK007 | | 土坑（欠番） | |
| | SK008 | | 土坑（欠番） | |
| | SX001 | 009 | 遺物包含層 | 平安時代 |
| | SX002 | 010 | 遺物包含層 | 縄文時代 |

## 第２節　遺跡の位置と環境

### １　地理的環境

八千代宗像線の道路工事で調査された３遺跡のそれぞれの所在番地は、際作遺跡が千葉県印旛郡印旛村岩戸字木戸尻3247－6ほか、六反目遺跡が千葉県印旛郡印旛村岩戸字西田2971－3ほか、広台遺跡が千葉県印旛郡印旛村岩戸字広台3847－6ほかである。印旛郡印旛村は下総台地の北部に位置し、印旛沼に接している。３遺跡は本埜村東部から、印旛沼西部北岸に向かって南北に細長くのびる台地上にある。北側約3.5kmの地点には、千葉ニュータウン東端にちかい北総鉄道線印西牧の原駅がある。

下総台地は第四紀更新世に形成され、平坦な台地が小支谷によって開析され、複雑な地形となっている。下総台地の中央に位置する印旛沼にも大小の河川が流れ込み、周囲には樹枝状の台地が形成されている。印旛沼西部は東西に細長くのび、南北両岸に多数の川が流入している。これらの南北に流れる川に両側をはさまれるようにして、ほそ長い台地が形成された。

３遺跡のある台地の北側を師戸川が西から東へ、さらに向きを変えて北から南へと印旛沼に流入している。また台地西側にも、同じく小さな川が北から南へと印旛沼に流れこんでいる。際作遺跡は、その台地中央やや東側の台地縁辺付近にある。六反目遺跡は台地中央付近、広台遺跡は台地中央西端の舌状台地に位置する。台地の標高は約26～28mで、周囲の水田地帯との比高差は約22mである。

### ２　歴史的環境

印旛沼は、人間や動植物の繁栄に欠かせない重要な水源を提供してきた。印旛沼周辺には、人間の生活痕跡が数多く残り、遺跡となって分布している。今回調査した３遺跡の所在する岩戸集落周辺の遺跡分布を見てみよう[2]。

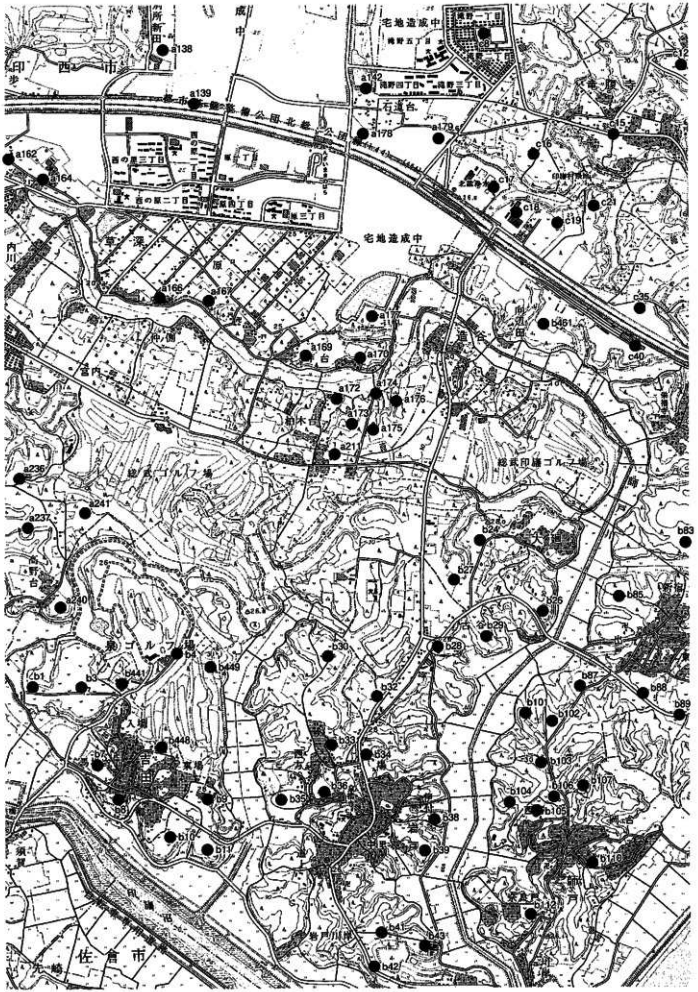
旧石器時代の遺跡は（第２表）、印旛沼付近では確認例が少なく、主に北総鉄道周辺に分布していた（第９図）。これらは、千葉ニュータウン関連の大規模開発に伴って、旧石器時代の遺跡が発見される事例が多く、大規模開発の少ない地域では旧石器時代遺跡の調査件数が少ないため、旧石器遺跡の分布が偏在していると思われる。

師戸川上流域の北側では、北総鉄道にそって六角遺跡（a139）、石道谷津遺跡（a142）、石道台遺跡（a178）、地国穴台遺跡（a179）、向原遺跡（c17）、伍斗蒔遺跡（c18）、雨古瀬遺跡（c35）、一の作遺跡（a177）、向辺田遺跡（b461）、角田台遺跡（c40）が分布する。師戸川流域でも、北総鉄道から離れて南へと向きを変える周辺には、旧石器時代の遺跡がほとんど分布していない。今回調査した周辺では際作遺

第２表　周辺遺跡（旧石器時代）

| 市町村名 | 番号 | 遺跡名 | 市町村名 | 番号 | 遺跡名 | 市町村名 | 番号 | 遺跡名 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 印西市 | a139 | 六角遺跡 | 印西市 | a240 | 松崎Ⅵ遺跡 | 本埜村 | c8 | 大門遺跡 |
| 印西市 | a142 | 石道谷津遺跡 | 印西市 | a241 | 松崎Ⅶ遺跡 | 本埜村 | c17 | 向原遺跡 |
| 印西市 | a177 | 一の作遺跡 | 印旛村 | b4 | 木戸口遺跡 | 本埜村 | c18 | 伍斗蒔遺跡 |
| 印西市 | a178 | 石道台遺跡 | 印旛村 | b8 | 馬ヶ台遺跡 | 本埜村 | c21 | 天王台西遺跡 |
| 印西市 | a179 | 地国穴台遺跡 | 印旛村 | b28 | 際作遺跡 | 本埜村 | c35 | 雨古瀬遺跡 |
| 印西市 | a235 | 松崎Ⅰ遺跡 | 印旛村 | b89 | 前原第２遺跡 | 本埜村 | c40 | 角田台遺跡 |
| 印西市 | a236 | 松崎Ⅱ遺跡 | 印旛村 | b461 | 向辺田遺跡 | 本埜村 | c41 | 向原北遺跡 |
| 印西市 | a237 | 松崎Ⅲ遺跡 | | | | | | |

第９図　周辺遺跡（旧石器時代）




第10図　周辺遺跡（縄文時代）

跡（b28）しか見つかっておらず、孤立した存在となっている。際作遺跡（b28）の旧石器については、印旛郡市文化財センターの実施した1991年の第１次調査で、頁岩製剥片が出土した。遺跡が分布していなくとも、旧石器時代遺跡が存在する可能性があり、調査の機会されあれば、今後遺跡数が増加すると考えられる。

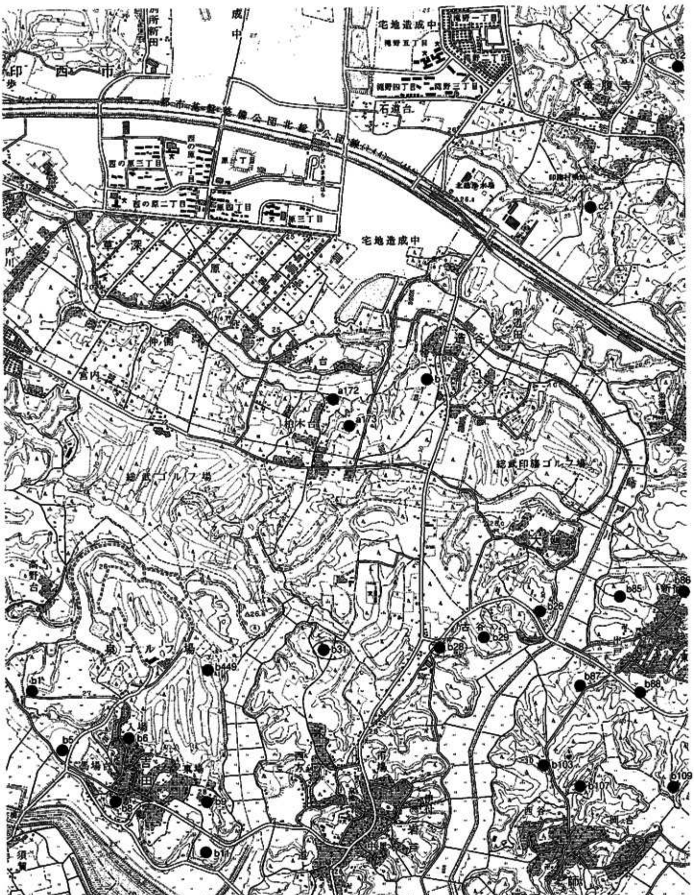
縄文時代の遺跡は（第３表）、主に河川流域を中心に周辺全域に分布していた（第10図）。師戸川上流域では北総鉄道線印西牧の原駅南側に、貢遺跡（a169）、笈輪遺跡（a170）、一の作遺跡（a177）、柏木台遺跡（a172）、亀ノ甲西遺跡（a173）、柏木台遺跡（a211）、亀ノ甲北遺跡（a174）、亀ノ甲南遺跡（a175）、亀ノ甲東遺跡（a176）が密集し、遺跡群を形成していた。これらの遺跡で加曽利Ｅ式や加曽利Ｂ式などの縄文土器が確認され、縄文時代中後期の遺跡である。さらに南へと向きを変えた流域の台地上に、縄文時代の遺跡が分布していた。

また岩戸集落西側に隣接する台地上にも、縄文時代遺跡が広く分布していた。ただし台地中央付近では、さほど縄文時代遺跡の分布が見られず、空白となっており、台地上の河川流域沿いに多く分布している。

印旛沼北岸の貝塚として船作第１遺跡（石神台貝塚、b38）と戸ノ内遺跡（b110）がある。船作第１遺跡は、今回調査した３遺跡と同じ台地上の東側縁辺に位置している。師戸川に面した台地斜面に、長さ30m、幅10mほどの貝層が形成されていた。ヤマトシジミを主体とする縄文時代後期の貝塚であった。また東側に隣接する台地上東側に、後期の貝塚である戸ノ内遺跡が位置している。

第３表　周辺遺跡（縄文時代）

| 市町村名 | 番号 | 遺跡名 | 市町村名 | 番号 | 遺跡名 | 市町村名 | 番号 | 遺跡名 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 印西市 | a138 | 別所新田遺跡 | 印旛村 | b4 | 木戸口遺跡 | 印旛村 | b88 | 古用地遺跡 |
| 印西市 | a139 | 六角遺跡 | 印旛村 | b7 | 向山第２遺跡 | 印旛村 | b89 | 前原第２遺跡 |
| 印西市 | a142 | 石造谷津遺跡 | 印旛村 | b8 | 馬々台遺跡 | 印旛村 | b101 | 時山遺跡 |
| 印西市 | a162 | 弁天前遺跡 | 印旛村 | b9 | 東場遺跡 | 印旛村 | b102 | 白幡遺跡 |
| 印西市 | a164 | 庚申前遺跡 | 印旛村 | b10 | 向込内遺跡 | 印旛村 | b103 | 入堀込第１遺跡 |
| 印西市 | a166 | 原東遺跡 | 印旛村 | b11 | 馬見台遺跡 | 印旛村 | b104 | 持田遺跡 |
| 印西市 | a167 | 新堤下遺跡 | 印旛村 | b24 | 西田遺跡 | 印旛村 | b105 | 後田遺跡 |
| 印西市 | a169 | 貢遺跡 | 印旛村 | b26 | 台田遺跡 | 印旛村 | b106 | 入堀込第２遺跡 |
| 印西市 | a170 | 笈輪遺跡 | 印旛村 | b27 | 西原遺跡 | 印旛村 | b107 | 掘田第１遺跡 |
| 印西市 | a172 | 柏木台遺跡 | 印旛村 | b28 | 際作遺跡 | 印旛村 | b110 | 戸ノ内遺跡 |
| 印西市 | a173 | 亀ノ甲西遺跡 | 印旛村 | b29 | 古谷遺跡 | 印旛村 | b112 | 天ノ宮遺跡 |
| 印西市 | a174 | 亀ノ甲北遺跡 | 印旛村 | b30 | 貝柿遺跡 | 印旛村 | b444 | 佐伝原第２遺跡 |
| 印西市 | a175 | 亀ノ甲南遺跡 | 印旛村 | b32 | 当耀田遺跡 | 印旛村 | b448 | 遙昌寺遺跡 |
| 印西市 | a176 | 亀ノ甲東遺跡 | 印旛村 | b33 | 上ノ坊遺跡 | 印旛村 | b449 | トゥ前遺跡 |
| 印西市 | a177 | 一の作遺跡 | 印旛村 | b34 | 木ノ宮遺跡 | 印旛村 | b461 | 向辺田遺跡 |
| 印西市 | a178 | 石造台遺跡 | 印旛村 | b35 | 広台遺跡 | 本埜村 | c8 | 大門遺跡 |
| 印西市 | a179 | 地国穴台遺跡 | 印旛村 | b36 | 辺田遺跡 | 本埜村 | c12 | 天王前遺跡 |
| 印西市 | a211 | 柏木台遺跡 | 印旛村 | b38 | 船作第１遺跡 | 本埜村 | c15 | 三度山遺跡 |
| 印西市 | a235 | 松崎Ⅰ遺跡 | 印旛村 | b39 | 船作第２遺跡 | 本埜村 | c16 | 陣場台遺跡 |
| 印西市 | a236 | 松崎Ⅱ遺跡 | 印旛村 | b41 | 瓜堀込第２遺跡 | 本埜村 | c17 | 向原遺跡 |
| 印西市 | a237 | 松崎Ⅲ遺跡 | 印旛村 | b42 | 瓜堀込第１遺跡 | 本埜村 | c18 | 伍斗蒔遺跡 |
| 印西市 | a240 | 松崎Ⅳ遺跡 | 印旛村 | b43 | 道作遺跡 | 本埜村 | c19 | 草深新田遺跡 |
| 印西市 | a241 | 松崎Ⅶ遺跡 | 印旛村 | b83 | 奥山遺跡 | 本埜村 | c21 | 天王台西遺跡 |
| 印旛村 | b1 | 西ノ原第１遺跡 | 印旛村 | b85 | 鳥居遺跡 | 本埜村 | c35 | 南古瀬遺跡 |
| 印旛村 | b3 | 西ノ原第３遺跡 | 印旛村 | b87 | 刈屋遺跡 | 本埜村 | c40 | 角田台遺跡 |




第11図　周辺遺跡（弥生時代）

弥生時代の遺跡は（第４表）、比較的少ない（第11図）。主に印旛沼に面した台地上に少数散在し、師戸川上流など谷奥地には分布していない。今回の調査で六反目遺跡（b31）から弥生時代後期の住居跡が検出され、また同じ台地上の際作遺跡（b28）でも弥生土器が出土しているので、六反目遺跡周辺の台地中央に弥生時代集落がひろがる可能性がうかがえる。

第４表　周辺遺跡（弥生時代）

| 市町村名 | 番号 | 遺跡名 | 市町村名 | 番号 | 遺跡名 | 市町村名 | 番号 | 遺跡名 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 印西市 | a172 | 柏木台遺跡 | 印旛村 | b26 | 台田遺跡 | 印旛村 | b87 | 刈屋遺跡 |
| 印西市 | a173 | 亀ノ甲西遺跡 | 印旛村 | b28 | 際作遺跡 | 印旛村 | b88 | 古用地遺跡 |
| 印西市 | a235 | 松崎Ⅰ遺跡 | 印旛村 | b29 | 古谷遺跡 | 印旛村 | b103 | 入堀込第１遺跡 |
| 印旛村 | b1 | 西ノ原第１遺跡 | 印旛村 | b31 | 六反目遺跡 | 印旛村 | b107 | 掘田第１遺跡 |
| 印旛村 | b5 | 向山第１遺跡 | 印旛村 | b41 | 瓜堀込第２遺跡 | 印旛村 | b109 | ちぼくろ遺跡 |
| 印旛村 | b6 | 佐伝原遺跡 | 印旛村 | b42 | 瓜堀込第１遺跡 | 印旛村 | b112 | 天ノ宮遺跡 |
| 印旛村 | b8 | 馬々台遺跡 | 印旛村 | b43 | 道作遺跡 | 印旛村 | b449 | トゥ前遺跡 |
| 印旛村 | b9 | 東場遺跡 | 印旛村 | b44 | 根古屋遺跡 | 本埜村 | c12 | 天王前遺跡 |
| 印旛村 | b11 | 馬見台遺跡 | 印旛村 | b85 | 滝尻遺跡 | 本埜村 | c21 | 天王台西遺跡 |
| 印旛村 | b17 | ミヨシロ遺跡 | 印旛村 | b86 | 高畑遺跡 | | | |

古墳時代の遺跡は（第５表）、印旛沼に面した台地上に多く密集し、そのほとんどが台地縁辺で群をなして築造された古墳である。師戸川上流域などやや谷奥に入ると遺跡の分布はまばらとなる（第12図）。古墳の分布は比較的判明しているが、集落に関する調査は少ない。際作遺跡の東側に隣接する古谷遺跡（b29）で、古墳時代中期の住居跡が検出された。また、広台遺跡（b35）では、古墳時代後期の７世紀後半から平安時代初期の10世紀初頭まで集落が確認されている。印旛沼周辺では台地上に集落が形成され、その周辺に古墳も築造されたと考えられるので、今後の調査で集落遺跡が解明されることに期待したい。

奈良・平安時代の遺跡は（第６表）、古墳時代と同様に印旛沼に面した台地上に多く分布するが、師戸川上流域での分布はまばらであった（第13図）。奈良・平安時代の集落遺跡も、古墳時代集落と同じく調査例が少ない。広台遺跡（b35）では古墳時代に出現した集落が、奈良・平安時代まで存続した。

中近世の遺跡は少なく（第７表）、屋敷跡や塚が集落周辺に近在し、近世の野馬土手がその他の地点に分布する傾向がうかがえる（第14図）。

註１　猪股佳二「千葉県印旛郡印旛村台田遺跡・古谷遺跡・際作遺跡」『印旛郡市文化財センター年報』８、1992年。

２　斉藤毅他『岩戸広台遺跡Ａ地区・Ｂ地区発掘調査報告書』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第17集、1988年。

３　『千葉県埋蔵文化財分布地図（１）』千葉県文化財センター調査報告第316集、1997年。

第12図　周辺遺跡（古墳時代）

第13図　周辺遺跡（奈良・平安時代）

第14図　周辺遺跡（中近世）

第５表　周辺遺跡（古墳時代）

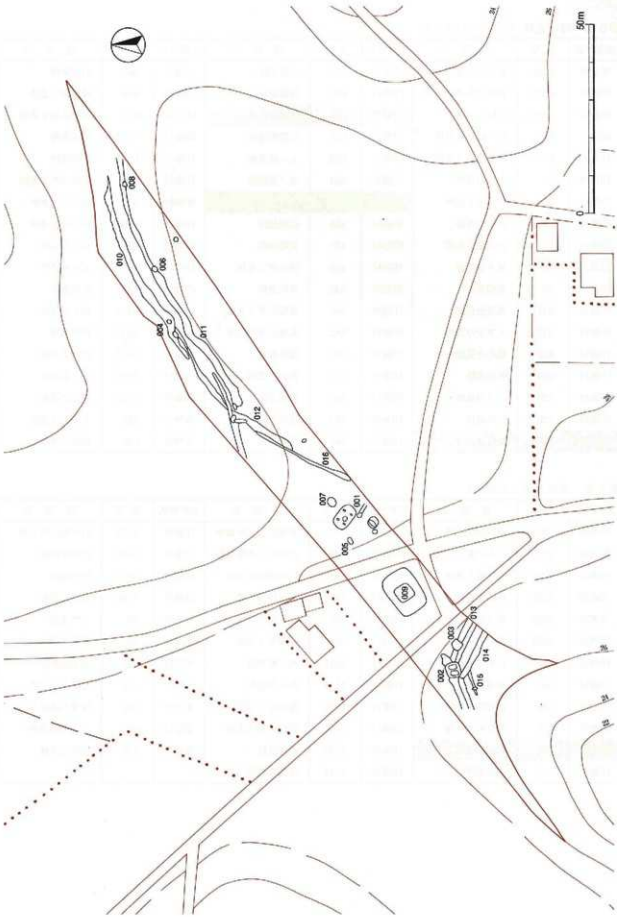
| 市町村名 | 番号 | 遺跡名 | 市町村名 | 番号 | 遺跡名 | 市町村名 | 番号 | 遺跡名 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 印西市 | a172 | 松木台遺跡 | 印旛村 | b40 | 黒保遺跡 | 印旛村 | b83 | 奥山遺跡 |
| 印西市 | a235 | 松崎Ⅰ遺跡 | 印旛村 | b41 | 瓜堀込第２遺跡 | 印旛村 | b85 | 滝尻遺跡 |
| 印西市 | a236 | 松崎Ⅱ遺跡 | 印旛村 | b42 | 瓜堀込第１遺跡 | 印旛村 | b86 | 高郷遺跡 |
| 印旛村 | b1 | 西ノ原第１遺跡 | 印旛村 | b43 | 道作遺跡 | 印旛村 | b87 | 刈屋遺跡 |
| 印旛村 | b3 | 西ノ原第３遺跡 | 印旛村 | b44 | 根古屋遺跡 | 印旛村 | b89 | 前原第２遺跡 |
| 印旛村 | b4 | 木戸口遺跡 | 印旛村 | b47 | 岩戸古墳 | 印旛村 | b95 | 刈屋第１号墳 |
| 印旛村 | b5 | 向山第１遺跡 | 印旛村 | b49 | 百保第１号墳 | 印旛村 | b96 | 刈屋第２号墳 |
| 印旛村 | b6 | 佐伝原遺跡 | 印旛村 | b50 | 百保第２号墳 | 印旛村 | b97 | 刈屋第３号墳 |
| 印旛村 | b7 | 向山第２遺跡 | 印旛村 | b51 | 百保第３号墳 | 印旛村 | b98 | 刈屋第４号墳 |
| 印旛村 | b8 | 馬々台遺跡 | 印旛村 | b52 | 百保第４号墳 | 印旛村 | b99 | 刈屋第５号墳 |
| 印旛村 | b9 | 東場遺跡 | 印旛村 | b54 | 当羅田第１号墳 | 印旛村 | b100 | 刈屋第６号墳 |
| 印旛村 | b10 | 向込内遺跡 | 印旛村 | b55 | 当羅田第２号墳 | 印旛村 | b103 | 入堀込第１遺跡 |
| 印旛村 | b11 | 馬見台遺跡 | 印旛村 | b56 | 当羅田第３号墳 | 印旛村 | b104 | 持田遺跡 |
| 印旛村 | b12 | 西ノ原第１号墳 | 印旛村 | b57 | 当羅田第４号墳 | 印旛村 | b105 | 後田遺跡 |
| 印旛村 | b13 | 西ノ原第２号墳 | 印旛村 | b58 | 当羅田第５号墳 | 印旛村 | b106 | 入堀込第２遺跡 |
| 印旛村 | b14 | 西ノ原第３号墳 | 印旛村 | b59 | 岩戸広台古墳 | 印旛村 | b107 | 掘田第１遺跡 |
| 印旛村 | b15 | 西ノ原第４号墳 | 印旛村 | b62 | 岩戸市場古墳 | 印旛村 | b108 | 掘田第２遺跡 |
| 印旛村 | b16 | 西ノ原第５号墳 | 印旛村 | b63 | 岩戸船作古墳 | 印旛村 | b111 | 西ノ原遺跡 |
| 印旛村 | b17 | ミヨシロ遺跡 | 印旛村 | b64 | 聖天古墳 | 印旛村 | b112 | 天ノ宮遺跡 |
| 印旛村 | b18 | 池の台遺跡 | 印旛村 | b65 | 聖天第１号墳 | 印旛村 | b113 | 宮田遺跡 |
| 印旛村 | b20 | 割野第２号墳 | 印旛村 | b66 | 聖天第２号墳 | 印旛村 | b114 | 竜ノ谷遺跡 |
| 印旛村 | b22 | 柿作古墳 | 印旛村 | b67 | 聖天第３号墳 | 印旛村 | b116 | 掘田第２号墳 |
| 印旛村 | b23 | 池ノ台古墳 | 印旛村 | b68 | 聖天第４号墳 | 印旛村 | b117 | 屋田第１号墳 |
| 印旛村 | b24 | 西田遺跡 | 印旛村 | b69 | 聖天第５号墳 | 印旛村 | b118 | 屋田第２号墳 |
| 印旛村 | b25 | 上ノ内遺跡 | 印旛村 | b70 | 鳥屋第１号墳 | 印旛村 | b445 | 木戸口古墳 |
| 印旛村 | b26 | 台田遺跡 | 印旛村 | b71 | 鳥屋第２号墳 | 印旛村 | b448 | 遙昌寺遺跡 |
| 印旛村 | b28 | 際作遺跡 | 印旛村 | b72 | 鳥屋第３号墳 | 印旛村 | b450 | 宗像神社裏遺跡 |
| 印旛村 | b29 | 古谷遺跡 | 印旛村 | b73 | 鳥屋第４号墳 | 本埜村 | c11 | 竜腹寺古墳群 |
| 印旛村 | b30 | 貝柳遺跡 | 印旛村 | b74 | 石井第１号墳 | 本埜村 | c12 | 天王前遺跡 |
| 印旛村 | b31 | 六反目遺跡 | 印旛村 | b75 | 石井第２号墳 | 本埜村 | c13 | 竜腹寺２号墳 |
| 印旛村 | b33 | 上ノ坊遺跡 | 印旛村 | b76 | 岩戸池ノ下古墳 | 本埜村 | c14 | 竜腹寺１号墳 |
| 印旛村 | b34 | 木ノ宮遺跡 | 印旛村 | b77 | 黒保第１号墳 | 本埜村 | c20 | 天王台古墳 |
| 印旛村 | b35 | 広台遺跡 | 印旛村 | b78 | 黒保第２号墳 | 本埜村 | c21 | 天王台西遺跡 |
| 印旛村 | b36 | 辺田遺跡 | 印旛村 | b79 | 黒保第３号墳 | 本埜村 | c34 | 酒塚古墳 |
| 印旛村 | b37 | 市場遺跡 | 印旛村 | b80 | 黒保第４号墳 | 本埜村 | c44 | 滝１号墳 |
| 印旛村 | b39 | 船作第２遺跡 | 印旛村 | b81 | 黒保第５号墳 | | | |

第6表　周辺遺跡（奈良・平安時代）

| 市町村名 | 番号 | 遺跡名 | 市町村名 | 番号 | 遺跡名 | 市町村名 | 番号 | 遺跡名 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 印西市 | a229 | 新井堀Ⅰ遺跡 | 印旛村 | b29 | 古谷遺跡 | 印旛村 | b87 | 苅屋遺跡 |
| 印西市 | a230 | 新井堀Ⅱ遺跡 | 印旛村 | b30 | 貝柵遺跡 | 印旛村 | b89 | 前原第2遺跡 |
| 印西市 | a235 | 松崎Ⅰ遺跡 | 印旛村 | b31 | 六反目遺跡 | 印旛村 | b103 | 入堀込第1遺跡 |
| 印旛村 | b1 | 西ノ原第1遺跡 | 印旛村 | b32 | 当磯田遺跡 | 印旛村 | b104 | 持田遺跡 |
| 印旛村 | b3 | 西ノ原第3遺跡 | 印旛村 | b33 | 上ノ坊遺跡 | 印旛村 | b105 | 後田遺跡 |
| 印旛村 | b4 | 木戸口遺跡 | 印旛村 | b34 | 木ノ宮遺跡 | 印旛村 | b106 | 入堀込第2遺跡 |
| 印旛村 | b5 | 向山第1遺跡 | 印旛村 | b35 | 広台遺跡 | 印旛村 | b107 | 掘田第1遺跡 |
| 印旛村 | b6 | 佐伝原遺跡 | 印旛村 | b36 | 辺田遺跡 | 印旛村 | b108 | 掘田第2遺跡 |
| 印旛村 | b7 | 向山第2遺跡 | 印旛村 | b37 | 市場遺跡 | 印旛村 | b111 | 西ノ原遺跡 |
| 印旛村 | b8 | 馬々台遺跡 | 印旛村 | b39 | 舶作第2遺跡 | 印旛村 | b112 | 天ノ宮遺跡 |
| 印旛村 | b9 | 東場遺跡 | 印旛村 | b40 | 黒保遺跡 | 印旛村 | b113 | 宮田遺跡 |
| 印旛村 | b11 | 馬見台遺跡 | 印旛村 | b41 | 瓜堀込第2遺跡 | 印旛村 | b114 | 竜ノ谷遺跡 |
| 印旛村 | b17 | ミヨシロ遺跡 | 印旛村 | b42 | 瓜堀込第1遺跡 | 印旛村 | b446 | 仲内遺跡 |
| 印旛村 | b18 | 池の台遺跡 | 印旛村 | b43 | 道作遺跡 | 印旛村 | b448 | 遙昌寺遺跡 |
| 印旛村 | b24 | 西田遺跡 | 印旛村 | b44 | 根古屋遺跡 | 印旛村 | b449 | トヶ前遺跡 |
| 印旛村 | b25 | 上ノ内遺跡 | 印旛村 | b83 | 奥山遺跡 | 印旛村 | b461 | 向辺田遺跡 |
| 印旛村 | b26 | 台田遺跡 | 印旛村 | b85 | 滝尻遺跡 | 本埜村 | c21 | 天王台西遺跡 |
| 印旛村 | b28 | 際作遺跡 | 印旛村 | b86 | 高郷遺跡 | 本埜村 | c40 | 角田台遺跡 |

第7表　周辺遺跡（中近世）

| 市町村名 | 番号 | 遺跡名 | 市町村名 | 番号 | 遺跡名 | 市町村名 | 番号 | 遺跡名 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 印西市 | a212 | 原西開庚申塔 | 印旛村 | b45 | 米津出羽守屋敷跡 | 印旛村 | b456 | 魚屋地区所在塚 |
| 印西市 | a215 | 大木戸根十三塚 | 印旛村 | b46 | 古屋の長者屋敷跡 | 印旛村 | b457 | 高田山城跡 |
| 印西市 | a229 | 新井堀Ⅰ遺跡 | 印旛村 | b48 | 岩戸際作塚古墳 | 印旛村 | b459 | 船戸城跡 |
| 印西市 | a231 | 結縁寺城跡 | 印旛村 | b53 | 百保第5号墳 | 印旛村 | b461 | 向辺田遺跡 |
| 印西市 | a232 | 新井堀Ⅰ野馬土手 | 印旛村 | b60 | 面根第1号墳 | 本埜村 | c8 | 大門遺跡 |
| 印西市 | a235 | 松崎Ⅰ遺跡 | 印旛村 | b61 | 面根第2号墳 | 本埜村 | c9 | 竜腹寺跡 |
| 印西市 | a237 | 松崎Ⅱ遺跡 | 印旛村 | b111 | 西ノ原遺跡 | 本埜村 | c12 | 天王前遺跡 |
| 印旛村 | b9 | 東場遺跡 | 印旛村 | b114 | 竜ノ谷遺跡 | 本埜村 | c14 | 竜腹寺1号墳 |
| 印旛村 | b19 | 別野第1号墳 | 印旛村 | b115 | 掘田第1号墳 | 本埜村 | c16 | 陣場台遺跡 |
| 印旛村 | b21 | 別野第3号墳 | 印旛村 | b444 | 佐伝原第2遺跡 | 本埜村 | c21 | 天王台西遺跡 |
| 印旛村 | b31 | 六反目遺跡 | 印旛村 | b446 | 仲内遺跡 | 本埜村 | c40 | 角田台遺跡 |
| 印旛村 | b37 | 市場遺跡 | 印旛村 | b448 | 遙昌寺遺跡 | | | |

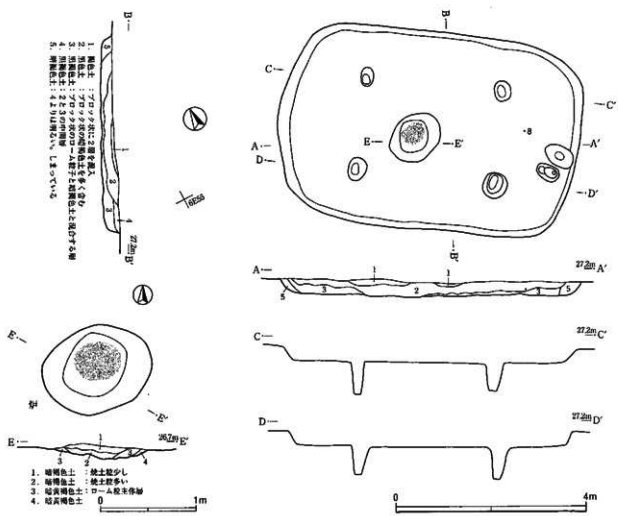



第15図　六反目遺跡の遺構分布図 (1/1,000)

# 第２章　六反目遺跡

六反目遺跡は、印旛郡印旛村岩戸地区の郷田集落の北側に広がっている。集落西北側の台地中央付近に若干の畑地や草地があるものの、周辺の景観は山林が主体である。八千代宗像線は山林を横切り、集落北辺の小規模な墓地に接するようにして計画された。調査区は、道路計画にそって幅約20m、長さ約200mの細長い範囲で、墓地に隣接して小さな塚があった。

六反目遺跡の調査面積は4,200㎡で、上層の本調査範囲は2,370㎡であった。下層の旧石器時代の調査については確認調査で終了した。検出された遺構は、弥生時代の住居跡１軒、中近世の竪穴状遺構２基、土坑５基、溝７条、近世の塚１基で、中近世の溝は調査全域から検出された（第15図）。




第16図　001住居跡

## 第1節　弥生時代

弥生時代の遺構は、住居跡が1軒検出された。

### 001住居跡（第16図、図版3）

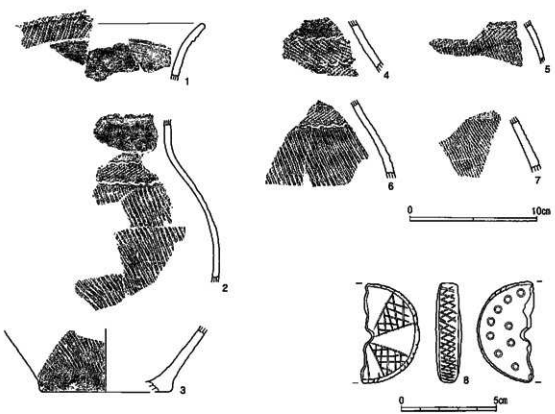
調査区中央やや西よりの6E46～48・6E56～59・6E66～69に位置する。形状は隅丸長方形で、短軸4.2m、長軸6.4m、長軸の方位はN－54°－Wであった。壁の深さは約30cmであった。住居内に柱穴が4基、および長軸上やや西よりに炉があった。その他に東壁に小ピットが2基あり、そのうち1基は出入り口用に梯子などをかけていた可能性がある。

覆土中から土器片が多数出土した。

**出土遺物**（第17図、図版14・16）

出土した遺物は、ほとんどが土器片であった。1は壷の口縁で、複合口縁に細かい縄文が施文されている。2は壷の胴部で肩部に結節の縄文が横位に帯状に施され、その下部に附加条縄文が施されている。3は壷の底部で、燃糸文が施文されている。4は壷の肩部で、羽状縄文が施されている。5、6、7も壷肩部の破片であった。8は土製紡錘車で、直径5.4cm、厚さ1.3cmであった。表裏の両面および円周外縁に、それぞれ異なる特徴的な模様が施文されていた。表面には放射状に区画された部分に、1つおきに線刻の格子文が描かれていた。裏面には葦のような管による円形文が、等心円状に施文されていた。円周外縁には線刻による交叉文が描かれていた。

図示した弥生土器の壷は、いずれも弥生時代後期印旛沼周辺型式であり、住居跡の年代も弥生時代後期と考えられる。




第17図　001住居跡出土遺物

## 第２節　中近世

中近世の遺構は、土坑や溝などが主体であった。遺構にともなう遺物がほとんど出土しなかったので、遺構の年代確定が困難であった。ただし、塚からは寛永通宝が出土したので、江戸時代に構築されたと推定される。

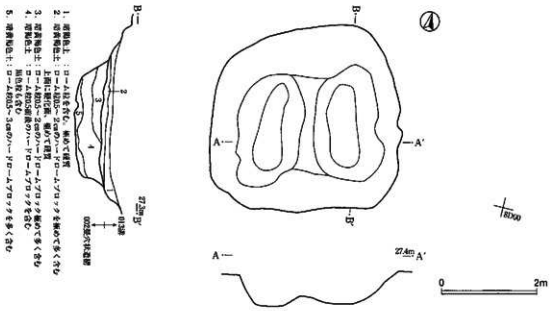
### １　竪穴状遺構

２基の竪穴状遺構が調査区西側から、いずれも溝の下部から検出された。

**002竪穴状遺構**（第18図、図版３）

調査区西側の7C87～88・7C97～98・8C07～08に位置する。013溝の屈曲部分の下部から検出された。掘り込みの外形は短軸3.9m、長軸4.0mで、正方形の形状に近い。方位はほぼ南北方向に向いている。底面には南北方向にのびる浅くて細長い土坑が２基並列し、その中間には、馬の背のように少し高くなった部分があった。底面、壁面ともに若干の凸凹があるものの、ほぼ平滑に掘られている。002竪穴状遺構の内部に、013溝の硬化面が存在したことから、溝の方が新しいと判断された。遺構底面の浅い土坑の覆土に、ロームブロックが多量に含まれていたことから、比較的早く人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

覆土中から土器片が１点出土したが、時期は不明で本遺構の性格、時期を確定するのが困難である。

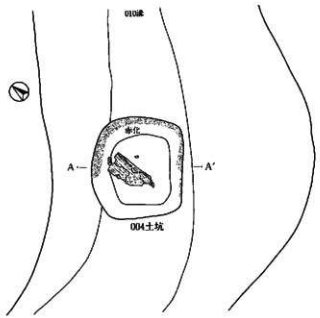


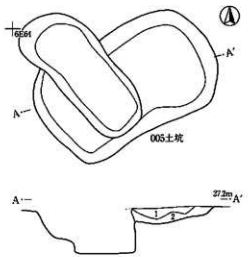

第18図　002竪穴状遺構

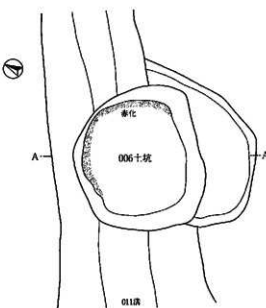
**003竪穴状遺構**（第23図）

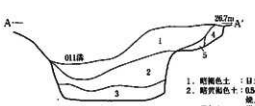
調査区西側の7D90～91・8D00～01に位置する。002竪穴状遺構の東側３ｍにあり、同じく013溝の下部から検出された。長軸2.9m、短軸2.3mの隅丸長方形の形状で、長軸の方位がN－35°－Eであった。底面に細長い土坑はなかったが、002竪穴状遺構と同じような形状であった。覆土中から013溝の硬化面が少量検出されたので、溝の方が新しく、竪穴状遺構が古いと判断された。遺物は出土せず、遺構の性格・時期については不明である。

2基の竪穴状遺構について、性格、時期ともに不明であったが、掘り方の状態や溝との関係から、時期的に中世と想定しておく。









第19図　004・005・006土坑

2　土坑

小規模な土坑が5基検出された。覆土中に炭化物や焼土粒子をふくんで、一部壁面が焼け、赤化した土坑があった。

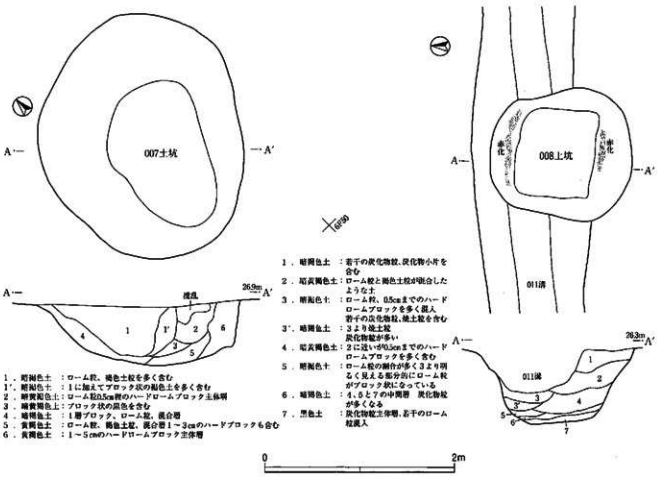
**004土坑**（第19図、図版3・4）

調査区東側の4H43に位置し、010溝の下部から検出された。形状は隅丸正方形に近く、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ25cmであった。壁面および底面は、丸みをおびたゆるやかな面を形成していた。覆土には炭化物が多く混ざり、中層で板状の炭化材が検出された。炭化材の大きさは長さ約50cm、幅約20cmであった。土坑の東側壁面上半が焼けて赤化していた。010溝との前後関係は、溝底面に炭が検出されたことから、010溝の方が新しいと判断された。

炭化材以外に遺物は出土しなかった。時期などは不明だが、土坑の形状、壁面の一部が焼けていたこと、炭化材が出土したことから、火葬墓の可能性が考えられる。

**005土坑**（第19図、図版4）

調査区中央やや西よりの6E64に位置する。大小2基の土坑からなる。両者の形状はともに隅丸長方形で、長軸が直交していた。大きいものは長軸1.9m、短軸1.1m、深さ15cm、小さいものは長軸1.5m、短軸0.65m、深さ45cmであった。遺物は出土しなかった。




第20図　007・008土坑

006土坑（第19図、図版４）

調査区東側の4J10に位置し、011溝の下部から検出された。形状は隅丸正方形に近く、長軸1.5m、短軸1.3m、深さ50cmであった。底面は比較的平坦で、壁面も直立していた。覆土中に炭化粒子と焼土粒子をふくみ、北側壁面が焼けて赤化していた。

遺物は出土しなかった。時期などは不明だが、土坑の形状や壁面の一部が焼けていたことから、火葬墓の可能性が考えられる。

007土坑（第20図、図版５）

調査区中央やや西よりの6E39～6F30に位置する。形状は不整楕円形で、長軸2.6m、短軸2.1m、深さ62cmであった。底面および壁面は凸凹が多く、整形されていなかった。遺物は出土しなかった。

008土坑（第20図、図版５）

調査区東端の3K70～71に位置し、011溝の下部から検出された。形状は正方形に近く、長軸1.5m、短軸1.3m、深さ78cmであった。底面は比較的平坦で、壁面は傾斜していた。覆土中に炭化粒子と焼土粒子をふくみ、北壁と南壁の一部が焼けて赤化していた。

遺物は出土しなかった。時期などは不明だが、土坑の形状や壁面の一部が焼けていたことから、火葬墓の可能性が考えられる。

５基の土坑のうち、溝の下部から検出された３基の土坑は火葬墓の可能性があるが、比較的離れた位置に分布し、墓地といえるほどの数量と密集性ではなかった。墓坑だとしても、特殊な埋葬例であっただろう。

３　溝

調査区全体から溝７条が検出された。いずれの溝も壁面が比較的なだらかで、浅い溝であった。

010溝（第21図、図版４・６）

調査区東側で、011溝に並行して円弧を描くようにのびている。長さ約70m、幅約1.8m、深さ30～40cmであった。壁面はなだらかで、明確な規格性はうかがえなかった。底面のところどころに、硬化した面があった。中間付近の下部に004土坑が位置していた。ほぼ並行して３m前後の間隔をおいて南側に、道路の轍のように011溝がのびていた。010溝と011溝は一対となって道を形成していた可能性が考えられる。

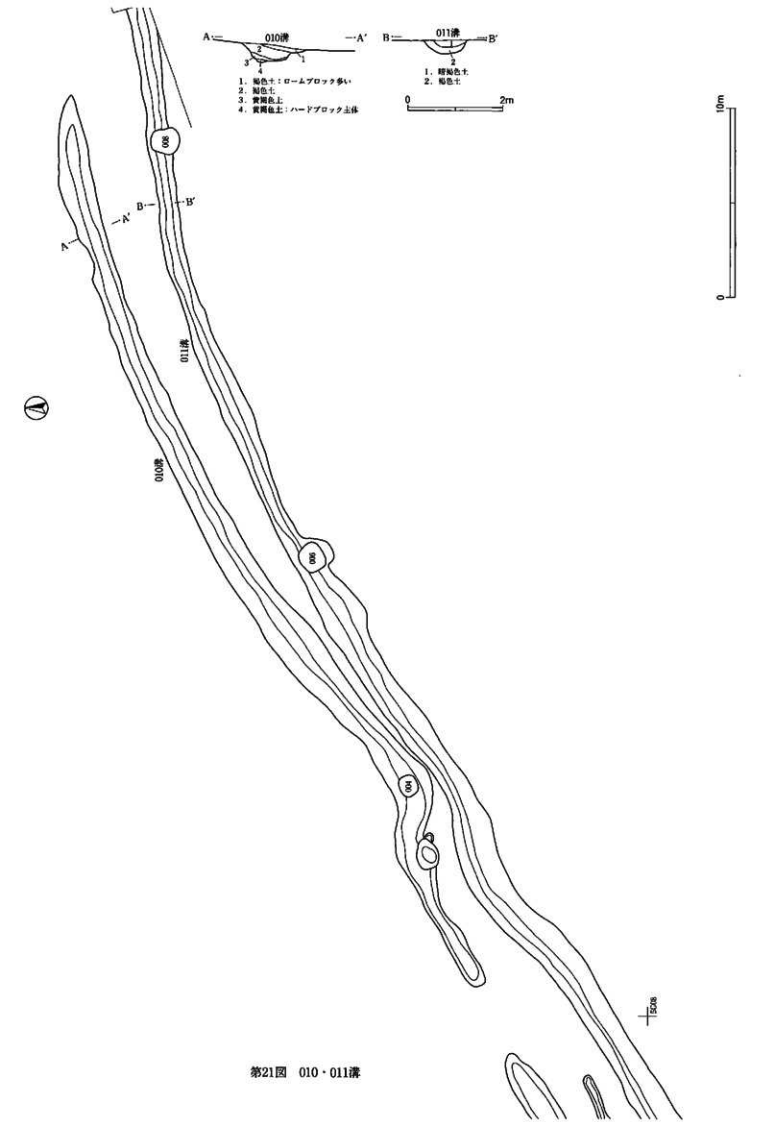
覆土中から縄文土器が少量出土した。

011溝（第21図、図版５・６）

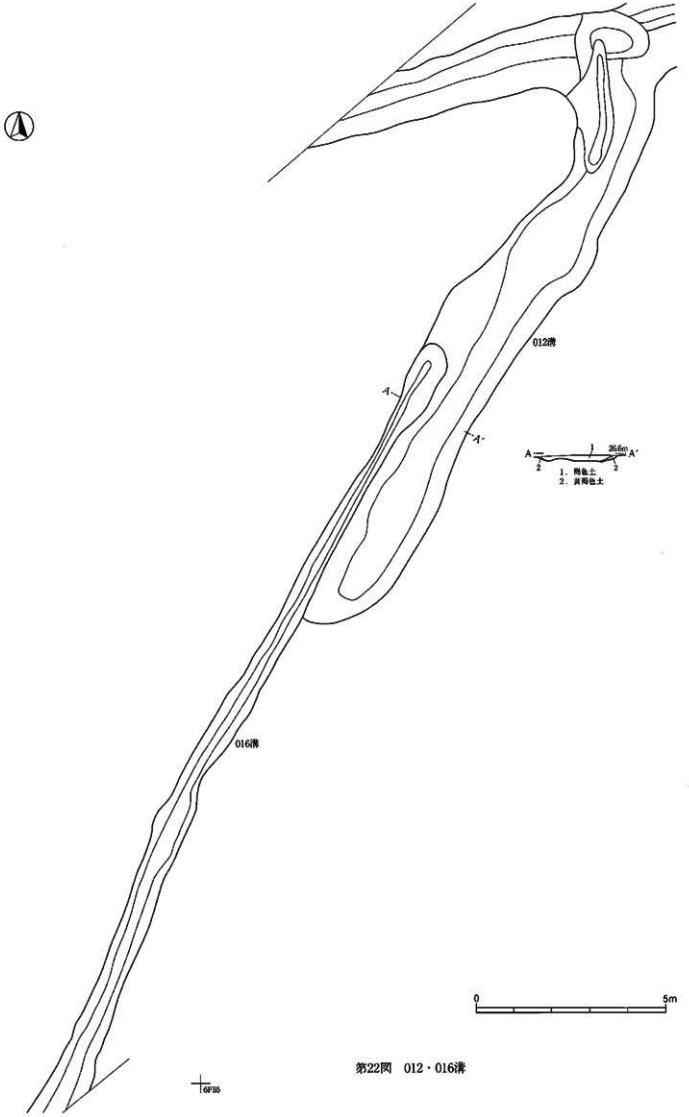
調査区東側で、010溝に並行して円弧を描くようにのびている。長さ約70m、幅約１～２m、深さ30～40cmであった。壁面はなだらかで、明確な規格性はうかがえなかった。東側の２ヶ所に006土坑と008土坑が位置していた。ほぼ並行して３m前後の間隔をおいて北側に、道路の轍のように010溝がのびていた。010溝と011溝は一対となって道を形成していた可能性が考えられる。

012溝（第22図、図版６）

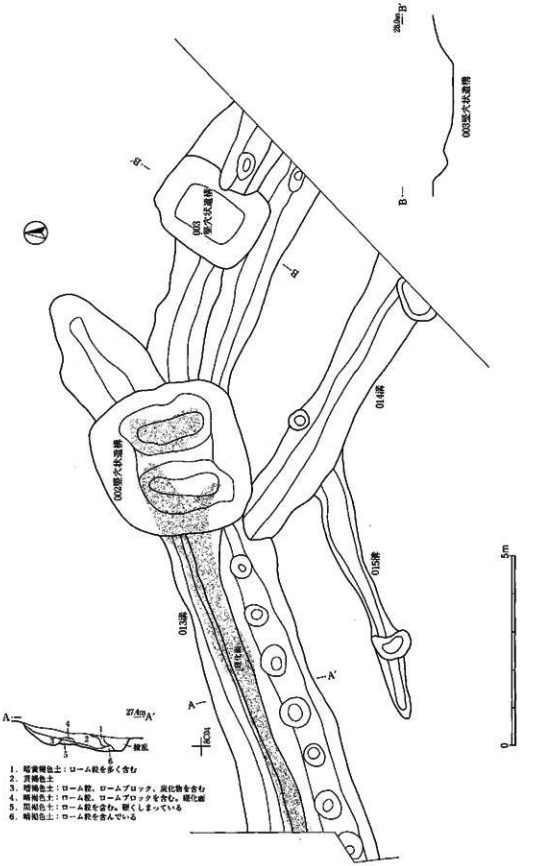
調査区中央で、東北から西南へ直線状にのびていた。長さ約20m、幅約２m、深さ15cmであった。壁面はなだらかで、明確な規格性はうかがえなかった。北側に010溝、南側に016溝が接している。010溝と011溝は道の轍の可能性が想定されたが、それに接してのびる012溝および016溝も、延長して続く轍の可能性が考えられる。




第21図　010・011溝




第22図　012・016溝




第23図　002・003竪穴状遺構、013・014・015溝

013溝（第23図、図版6・7）

調査区西側で、「へ」字形に屈曲してのびていた。長さ約20m、幅約2.5m、深さ40cmであった。壁面はなだらかで、明確な規格性はうかがえなかった。底面では北側と南側に溝が二本に分離していた。北側の溝底面の一部には硬化面が広がり、南側の溝底面の一部には浅い小ピットが連続して並んでいた。屈曲部分から002竪穴状遺構、東側部分から003竪穴状遺構が検出された。竪穴状遺構の埋没後に、溝の硬化面が形成されているので、竪穴状遺構と溝との間には直接的関係はないと考えられる。

014溝（第23図、図版7）

調査区西側で、013溝に平行してのびていた。長さ約8m、幅約1.5m、深さ40cmであった。

015溝（第23図、図版7）

調査区西側で、013溝に平行して、014溝から派生するようにのびていた。長さ約6.5m、幅約0.7m、深さ30cmであった。

013溝、014溝、015溝はほぼ平行してのびており、それぞれ別個の溝として存在したのではなく、一体となって機能していたと考えられる。いずれの溝からも出土遺物はなく、年代の比定は困難であった。

016溝（第22図、図版6）

調査区中央で、東北から西南へ直線状にのびていた。長さ約28m、幅約1m、深さ12cmであった。壁面はなだらかで、明確な規格性はうかがえなかった。北側に012溝が接し、さらにその北側に010溝が接している。010溝と011溝は道の轍の可能性がうかがえたが、それに接してのびる012溝および016溝も、延長して続く轍の可能性が考えられる。

覆土中から少量の縄文土器片が出土した。

調査区全体から検出された7条の溝は、車の轍のように並行してのびていたり、あるいは底面に硬化面のあるものが認められたことから、これらの溝は、道の可能性が高いと思われる。遺構の年代比定に結びつくような遺物は出土していないが、一応中近世の溝としておく。

4　塚

小規模な塚が1基検出された。

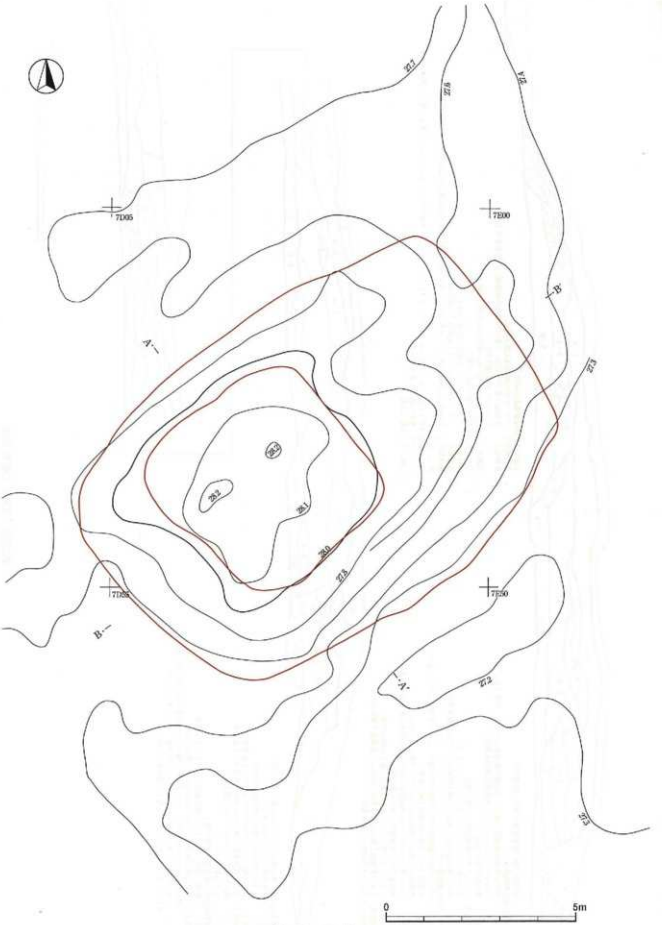
009塚（第24～25図、図版7・8）

調査区西側の6D・7Dで、道路にはさまれるように位置していた。調査前の観察では、さほど高い盛土は見られなかった。形状は長軸約12m、短軸約8.6mの長方形で、長軸の方位はN－53°－Eであった。高さは約80cmである。頂部の西南に約50cm四方の平坦な面が認められた。盛土はおもに暗褐色土、黄褐色土からなり、古墳のような顕著な版築構造ではなかった。盛土を除去した後、中央付近から長軸約2.4m、短軸約1.5mの長方形をした深さ約10cmの浅い土坑が検出された（図版8）。この土坑が塚に付随するかどうか不明である。

盛土周辺から少量の遺物が出土した。石造物などの記念物などが塚および周辺になく、塚の種類や築造の趣旨を予測するのは困難だった。

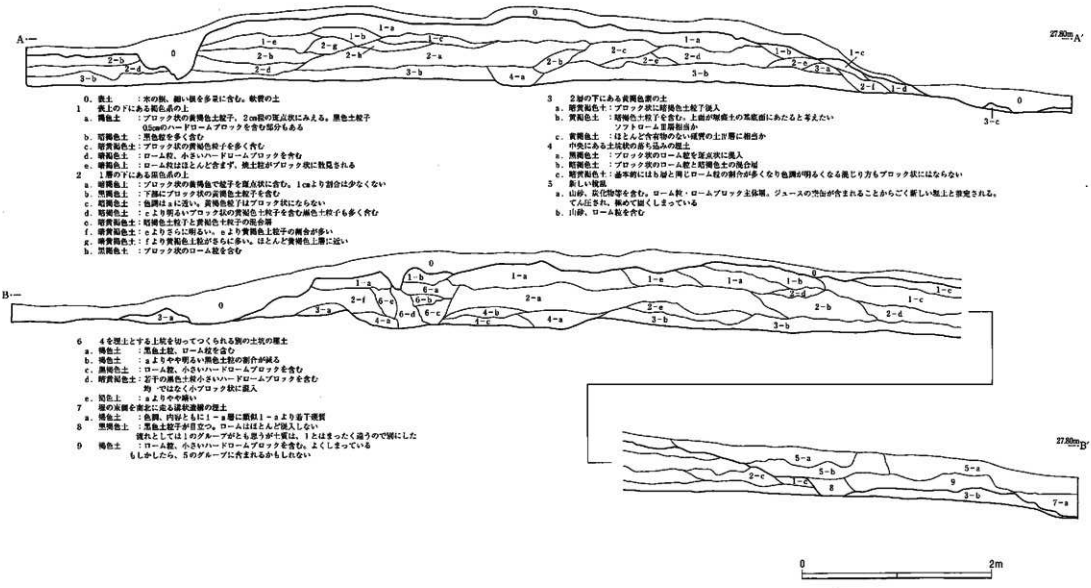
出土遺物（第26図、図版14・16・17）

009－1～009－7が図化できた塚の出土遺物で、縄文土器、弥生土器、平安時代の土師器、寛永通宝がふくまれていた。009－1は折返しの複合口縁で、口縁下部に爪形文、その下部に平行沈線が施文されていた。加曽利B式の縄文土器片と思われる。009－2と009－3には撚糸文が施文され、弥生土器片である。009－4



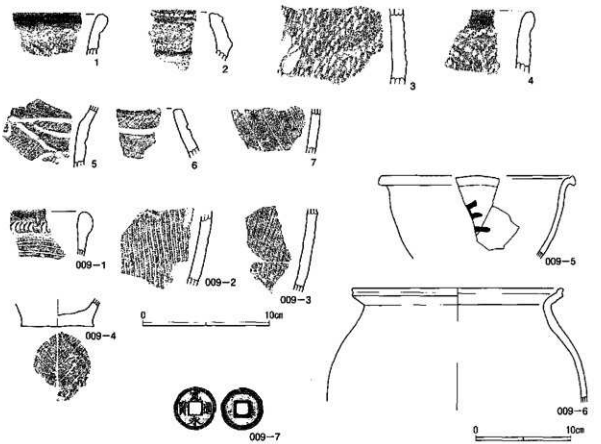
27.7
27.6
27.4
7D05
7E00
B'
A'
27.3
28.2
28.2
28.1
28.0
27.5
7D55
7E50
B
A'
27.2
27.3
0
5m


第24図　009塚




0. 表土　：水の脈、細い根を多量に含む。軟質の土
1　表土の下にある褐色系の土
a. 褐色土　：ブロック状の黄褐色土粒子、2cm程の斑点状にみえる。黒色土粒子0.5cmのハードロームブロックを含む部分もある
b. 暗褐色土　：黒色粒を多く含む
c. 暗黄褐色土：ブロック状の黄褐色粒子を多く含む
d. 暗褐色土　：ローム粒、小さいハードロームブロックを含む
e. 暗褐色土　：ローム粒はほとんど含まず、焼土粒がブロック状に散見される
2　1層の下にある黒色系の土
a. 暗褐色土　：ブロック状の黄褐色で粒子を斑点状に含む。1cmより割合は少なくない
b. 黒褐色土　：下部にブロック状の黄褐色土粒子を含む
c. 暗褐色土　：色調はaに近い。黄褐色粒子はブロック状にならない
d. 暗褐色土　：cより明るいブロック状の黄褐色土粒子を含む褐色土粒子も多く含む
e. 暗黄褐色土：暗褐色土粒子と黄褐色土粒子の混合層
f. 暗黄褐色土：eよりさらに明るい。eより黄褐色土粒子の割合が多い
g. 暗黄褐色土：fより黄褐色土粒がさらに多い。ほとんど黄褐色土層に近い
h. 黒褐色土　：ブロック状のローム粒を含む
3　2層の下にある黄褐色系の土
a. 暗黄褐色土：ブロック状に暗褐色土粒子従入
b. 黄褐色土　：暗褐色土粒子を含む。上面が凝縮土の基底面にあたると考えたいソフトローム主層相当か
c. 黄褐色土　：ほとんど含有物のない硬質の土質層に相当か
4　中央にある土坑状の落ち込みの埋土
a. 黒褐色土　：ブロック状のローム粒を斑点状に混入
b. 暗褐色土　：ブロック状のローム粒と暗褐色土の混合層
c. 暗黄褐色土：基本的にはb層と同じローム粒の割合が多くなり色調が明るくなる流じり方もブロック状にはならない
5　新しい攪乱
a. 山砂、炭化物等を含む。ローム粒・ロームブロック主体層。ジュースの空缶が含まれることからごく新しい埋土と推定される。てん圧され、板めて固くしまっている
b. 山砂、ローム粒を含む
6　4を埋土とする土坑を切ってつくられる別の土坑の埋土
a. 褐色土　：黒色土粒、ローム粒を含む
b. 褐色土　：aよりやや明るい黒色土粒の割合が減る
c. 黒褐色土　：ローム粒、小さいハードロームブロックを含む
d. 暗黄褐色土：若干の黒色土粒小さいハードロームブロックを含む
均一ではなく小ブロック状に混入
e. 褐色土　：aよりやや暗い
7　堀の末側を索まに走る諸状遺構の埋土
a. 褐色土　：色調、内容ともに1－a層に類似1－aより若干硬質
8　黒褐色土　：黒色土粒子が目立つ。ロームはほとんど従入しない
流れとしては1のグループがとも思うが土質は、1とはまったく違うので別にした
9　褐色土　：ローム粒、小さいハードロームブロックを含む。よくしまっている
もしかしたら、5のグループに含まれるかもしれない

第25図　009塚土層断面図

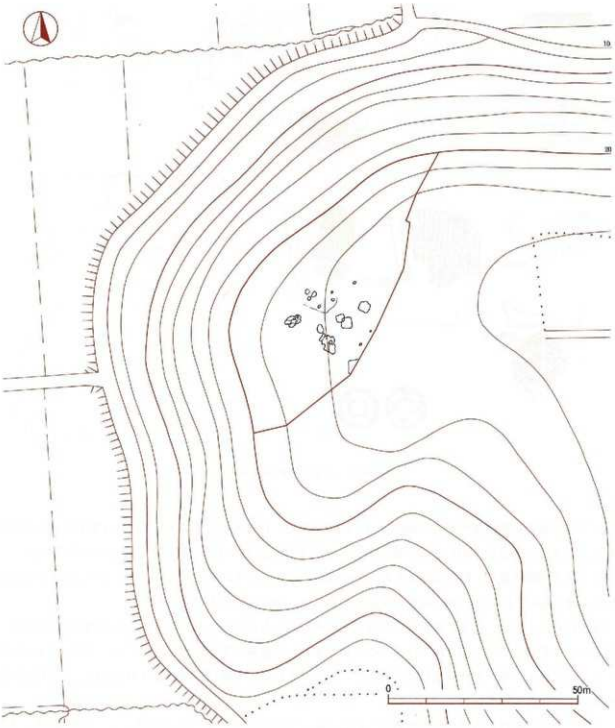



第26図　六反目遺跡出土遺物

は木葉痕のある土器底部である。009－5は土師器の鉢で、口径20.1cmであった。ロクロ整形痕のある胴部片に、1文字の墨書文字の右半分が確認されたが、遺存状況から文字を特定するまでには至らなかった。009－6は土師器の甕で、口径22.2cmであった。外面には粗いヘラ調整痕、内面にはナデの調整痕があった。009－5は9世紀、009－6は10世紀頃の土器と思われる。009－7は寛永通宝である。

塚からの出土品は、縄文時代から江戸時代までの幅広いものであった。本遺跡が集落の周縁に位置し、近くに墓地があること、調査区全体から中近世と思われる遺構が多く検出されたこと、また寛永通宝が出土したことから、塚の年代は江戸時代と考えられる。また、平安時代の土師器片の出土は、当該時代の遺構が近くに存在する可能性を示している。

ここで、溝その他から出土した遺物について記述しておきたい。1～3は010溝、5～7は013溝、4はトレンチから出土した。すべて縄文土器であった。1は折返しの複合口縁の下部にRLの縄文が施文されていた。4も同様な施文である。2は口縁に半裁竹管を使用して格円形の区画を施文し、さらに口縁上端にも半裁竹管による連続刺突文が施されていた。5と6は沈線による区画内に縄文が施文されていた。1、3～4は稲荷台式、2は阿玉台式、5～6は安行1式の縄文土器である。




第27図　広台遺跡と周辺の地形 (1/1,000)

# 第3章　広台遺跡

広台遺跡は、印旛郡印旛村岩戸地区の西側台地上に位置している。台地南側部分はすでに削平され、現在は運動公園になっている。開発に伴い付近で実施された遺跡調査の成果から、台地上の広範囲に、縄文時代および古墳時代から平安時代にかけての遺跡が存在していたと予想された。県道263号八千代宗像線は、この台地西北端を横切ることとなり、先端部分が調査されることになった（第27図）。周囲の水田との比高差は約20mである（図版９）。

広台遺跡の調査面積は2,100㎡で、上層の本調査範囲は850㎡。下層の旧石器時代の調査については確認調査で終了した。検出された遺構は、縄文時代の炉穴２基、土坑２基、遺物包含層１か所、平安時代の住居跡４軒、遺物包含層１か所であった（第28図）。

## 第１節　縄文時代

縄文時代の遺構は、炉穴２基、土坑２基、遺物包含層１か所が検出された。調査範囲全体から縄文時代の遺物が出土した。特に調査区東側から縄文時代早期・前期の土器が多く出土し、遺物包含層を形成していた。

### １　炉穴

**006炉穴**（第29図、図版９～10）

調査区中央やや東南の4D62～63・4D71～73・4D82～83に位置する。形状は不整形な楕円形で、長軸約6.2m、短軸約4.2m、深さ0.6～0.9mであった。焼けた底面が数か所で検出され、いくつかの炉穴が結合している。遺構中央付近から貝層が検出された。貝層上面の形状は甕箪形で、長軸約90cm、短軸約60cmであった。堆積の深さは約30cmで、さほど厚い堆積層ではなかった。この貝層に関しては、20cm四方のサンプル用小グリッドを２か所設定して取り上げた。覆土中からは焼土、炭化物、縄文土器が出土した。出土した縄文土器には貝殻条痕文系の繊維土器が多く、また周辺にも同様の土器が分布していたことから、縄文時代早期の遺構と考えられる。

**008炉穴**（第29図、図版10）

調査区西側の4C47～49・4C57～59の台地縁辺に位置する。形状は不整形な楕円形で、長軸約4.4m、短軸約３mであった。深さは東の台地側で浅く、中央部分で深くなって約0.8mであった。東の浅い部分が特に焼けていた。遺物は出土しなかった。

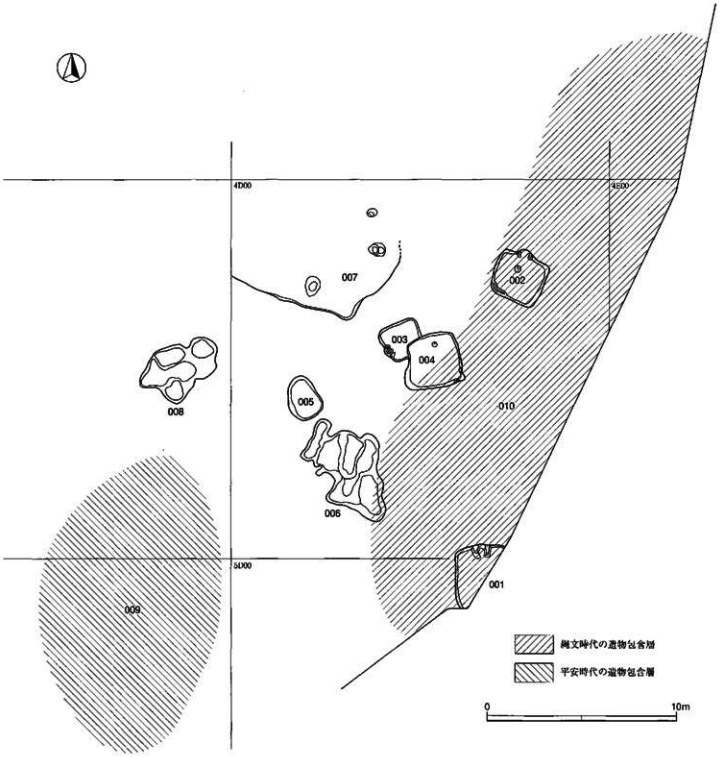
### ２　土坑

**005土坑**（第29図）

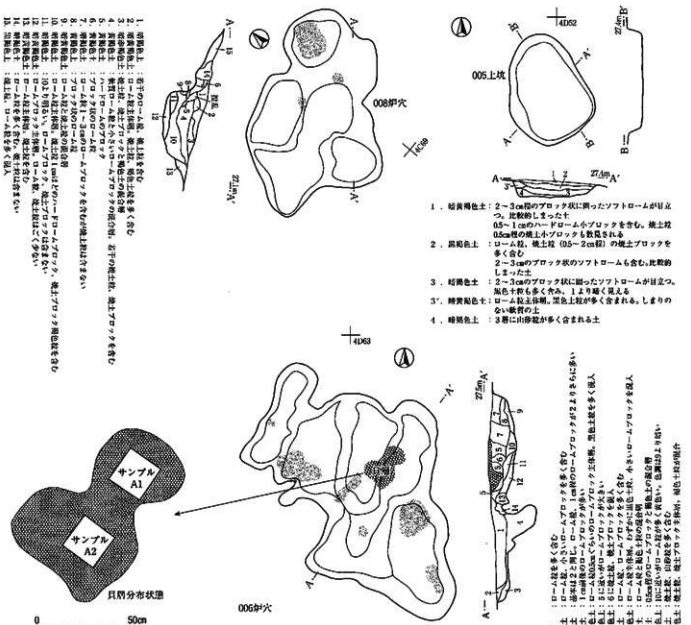
調査区中央の4D51～52に位置する。形状はやや三角形に近く、長軸2.25m、短軸1.22m、深さ0.32mであった。覆土中から縄文土器が少量出土した。

**007土坑**（第30図、図版11）

調査区北側の4D03・4D13・4D20～24・4D31～4D33に位置する。遺構南側に直角に曲がる浅い落ち込みがあり、その範囲内から直径１m前後の小さな土坑が３基検出された。３基のうち、２基の土坑覆土に




第28図　広台遺跡の遺構分布図 (1/200)

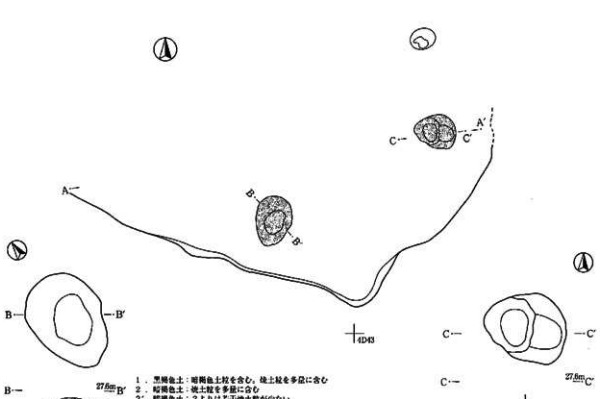



第29図　006・008炉穴、005土坑

は焼土が堆積していた。炉穴のように底面に焼けて硬化した部分はなかったが、火の使用された遺構と考えられる。周辺から少量の縄文土器が出土した。

3　遺物包含層

縄文時代の遺物包含層が調査区東側に広がっていた。約100点が出土し、大半は縄文時代早期の土器で、少量の礫、石器も含まれていた。出土層位はローム層上面の暗黄褐色土、暗茶褐色土で、土層の厚さは20～30cmであった。出土状況から見て、遺物包含層は東側の調査区外にも広がっていると予測される。




第30図　007土坑

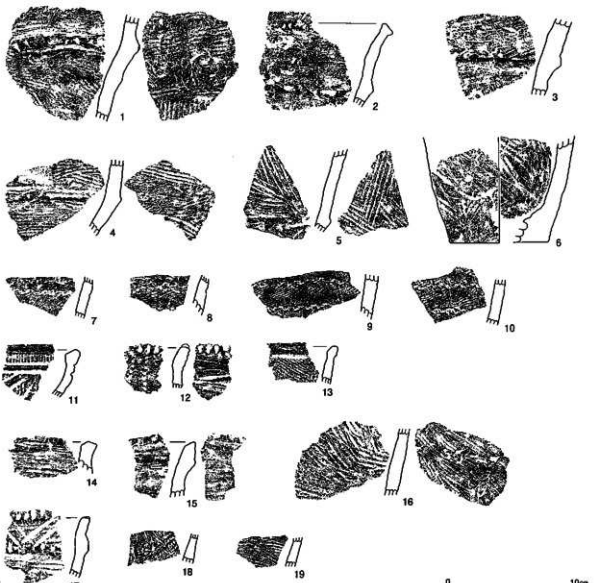
## 4　出土遺物

縄文時代のおもな出土遺物は縄文土器で、それ以外に少量の石器、006炉穴から出土した貝殻があった。

**縄文土器**（第31～32図、図版15～16）　1～13は006炉穴から出土した。1～6は貝殻条痕文が施文された繊維土器で、早期の茅山下層式の土器である。7～10には縄文細線文に結節縄文が施されている。11は口縁で、半裁竹管による細かい平行沈線文が施されている。12は口縁で、端部および外面に半裁竹管による刺突文、内面には貝殻条痕文が施文されている。13も口縁で、幅のせまい突帯の下部に縄文細線文が施文されている。7～11、13は中期初頭の五領ヶ台式、12は茅山下層式の土器である。

14～19は007土坑から出土した。14～16は貝殻条痕文が施された繊維土器である。17は口縁で、半裁竹管による斜位の平行沈線および刺突文が施されている。いずれも茅山下層式の土器である。

20～36は遺物包含層から出土した。20～25、32は貝殻条痕文が施された繊維土器で、早期の茅山下層式の土器である。26は縄文細線文が施され、五領ヶ台式である。27は、粗雑な貝殻圧痕文が施された前期後半の浮島式土器である。28と35は縄文が施され、繊維質の花積下層式の土器と思われる。29～31には細い



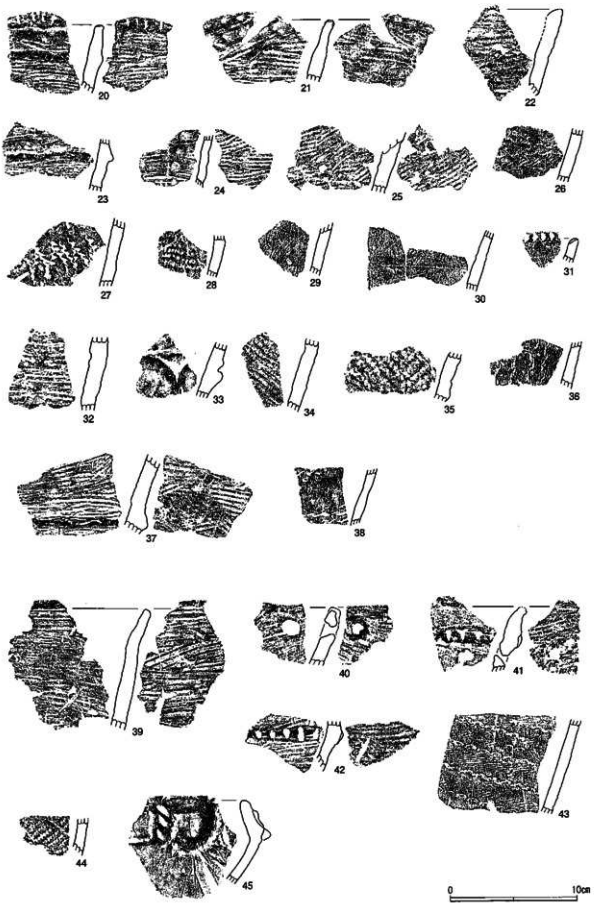

第31図　縄文土器（1）

沈線が施され、早期の子母口式土器と思われる。33の土器胎土には細かい雲母片がふくまれ、波状の隆帯が施されていた。阿玉台式土器と思われる。

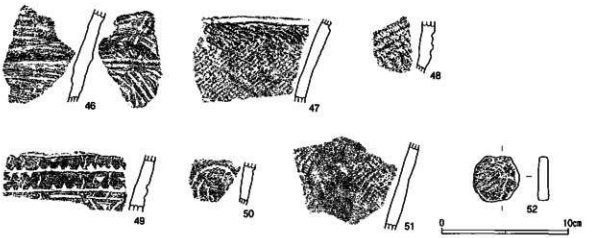
37～38は002住居跡から出土したもので、平安時代住居跡の覆土中に、縄文時代の遺物が混入したと考えられる。37は茅山下層式、38は五領ヶ台式と思われる。

39～45は平安時代の遺物包含層から出土した。39～42は貝殻条痕文系の土器である。40と41は口縁で、穿孔があった。43は結節縄文が施され、五領ヶ台式の土器である。45は口縁に突帯が施され、内外面が丹彩されていた。称名寺式と思われる。

46～48はトレンチから出土し、49～52は表面採集品である。46は貝殻条痕文系の土器である。47は横位に細い沈線が施され、その下に縄文が施文されていた。48には、粗い縄文が施文され、花積下層式の土器である。49は横位の沈線文に刺突文をめぐらせている。47、49、51は五領ヶ台式と思われる。50は沈線による円形文様が施文されていた。52は土錘で、縦3.5cm、横3.6cm、重さ11ｇであった。


20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
0
10cm

第32図　縄文土器（2）



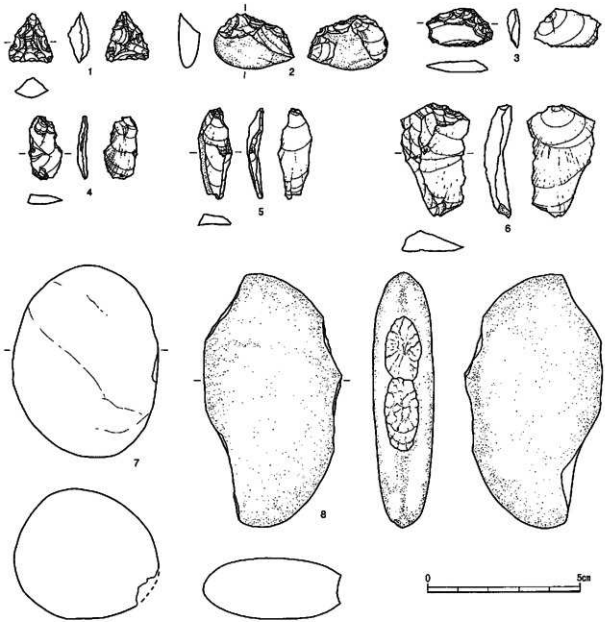

第33図　縄文土器（3）

石器（第34～35図、図版16）　石器には、石鏃や掻器、敲石などがあった。1～3は006炉穴から出土した。1はチャートの石鏃、2と3はチャートの掻器である。1～3の石材は灰色系チャートで、おそらく同類の石材を利用して作製されたと思われる。4は黒曜石の剥片である。5はチャートの剥片で、両側下部にわずかながら外皮が残置している。6はメノウの剥片である。4は縄文時代の遺物包含層、5と6は平安時代の遺物包含層から出土した。5と6は縄文時代の遺物が平安時代の包含層に混入したものであろう。

7と8は005土坑、9と10は縄文時代の遺物包含層から出土した。7は砂岩の磨石で、一部欠損していた。両端に顕著な摩滅痕はなかったが、磨ったような細かい擦痕が全体に残っていた。8は砂岩の敲石で、両側面の一部が欠いていた。9は砂岩の敲石で、上下両端に顕著な打撃痕が残り、上端一部が欠損していた。10は砂岩製の扁平な砥石の一部で、上面に摩滅した面が見られた。平安時代の砥石の可能性もあるが、一応縄文時代の遺物に載せておく。

第8表　広台遺跡の石器一覧表

| | 遺　構 | 遺物番号 | 器　種 | 石　材 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 006炉穴 | 0073 | 石鏃 | チャート | 16.5 | 14.5 | 7.0 | 1.1 | |
| 2 | 006炉穴 | 0054 | 掻器 | チャート | 26.1 | 18.3 | 7.1 | 3.8 | |
| 3 | 006炉穴 | 0079 | 掻器 | チャート | 12.5 | 22.1 | 4.0 | 1.2 | |
| 4 | 縄文時代包含層 | 0001a | 剥片 | 黒曜石 | 21.0 | 11.0 | 3.6 | 0.7 | |
| 5 | 平安時代包含層 | 0015 | 剥片 | チャート | 29.8 | 11.0 | 5.2 | 1.1 | |
| 6 | 平安時代包含層 | 0006 | 剥片 | メノウ | 37.4 | 23.2 | 9.0 | 5.3 | |
| 7 | 005土坑 | 0006 | 磨石 | 砂　岩 | 63.5 | 48.5 | 43.1 | 149.5 | |
| 8 | 005土坑 | 0005 | 敲石 | 砂　岩 | 84.2 | 45.9 | 20.1 | 107.2 | |
| 9 | 縄文時代包含層 | 0001 | 敲石 | 砂　岩 | 94.5 | 59.4 | 26.6 | 219.6 | |
| 10 | 縄文時代包含層 | 0005 | 砥石 | 砂　岩 | | | | 70.8 | 破片 |

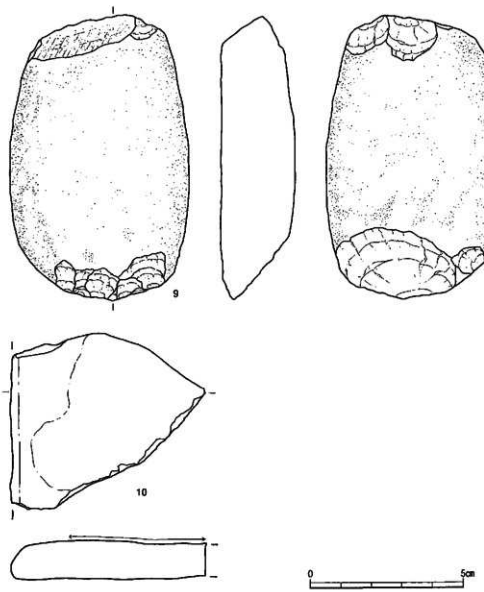



第34図　縄文時代の石器（1）

## 5　貝層

006炉穴の中央付近で貝殻が堆積していた。この炉穴からは、貝殻条痕文系の繊維土器が多く出土し、また遺構周辺にも同様な土器が分布していたので、縄文時代早期の炉穴と判断される。したがって炉穴内に堆積していた貝殻も、同時期に縄文人が廃棄した貝殻と考えられる。貝塚を形成するほどの堆積量ではないが、当時の人たちの棄てた残滓であり、食生活の一端を明らかにする資料である。

**採取**　貝層上面は瓢箪形をしていたので、接続する2か所の円形部分に、それぞれ20cm四方の小グリッドを設定した。小グリッド内の貝殻については、分析用に、深さを細かく区切って採取し、小グリッド以外の貝殻については、区切らずに一括して取り上げた。2か所の小グリッドは、北側をA1、南側をA2と名付けた（第29図）。A1の上面の標高は27.22m、A2の上面の標高は27.23mであった。貝殻の広がりは、下




第35図　縄文時代の石器（2）

方に向かうにしたがって狭まっていた。小グリッド内の貝殻を深さ5㎝ごとに区切って採取し、A1に関しては27.00mまで深さ約20㎝、A2に関しては27.15mまで深さ約8㎝の貝殻が堆積していた。採取した貝殻の量は、テンバコ（33×54×15㎝）で10箱であった。

**洗浄・選別**　採取した貝殻は、整理作業の段階で1㎜、2㎜、4㎜の3種類の篩を使用しながら、水で洗浄した。篩で洗いながら、貝殻以外の混入物を選別したが、見つかったのは若干の土器と、堆積層下部からの少量の焼土、炭化物だけであった。視認できる獣骨、魚骨、植物遺存体などは検出されず、貝殻からなる単純な堆積であったと判断される。

**分類・計測**　貝は大部分が二枚貝で、その大半はハイガイであった。その他の二枚貝に、オキシジミ、ハマグリが少量ふくまれていた。二枚貝以外ではサザエ、ヨコイトカケギリガイの巻貝、やや破砕したカキの殻も微量ながらあった（図版18）。個体計測は、A1とA2の小グリッドで採取された二枚貝については、

第９表　A1の種類別貝殻重量

| A1貝殻重量 | | 総重量 | 比率 | 右　側 計測可能 個体数 | 右　側 計測可能 重量(g) | 右　側 計測可能 平均(g) | 右　側 計測不可能 重量(g) | 左　側 計測可能 個体数 | 左　側 計測可能 重量(g) | 左　側 計測可能 平均(g) | 左　側 計測不可能 重量(g) | 左右識別不能 重量(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A1上層 | ハイガイ | 3,698.2 | 55.5% | 744 | 1,536.6 | 2.1 | 148.2 | 832 | 1,678.1 | 2.0 | 167.6 | 167.7 |
| (27.2m以上) | オキシジミ | 909.7 | 13.7% | 51 | 144.1 | 2.8 | 232.3 | 58 | 154.6 | 2.7 | 180.0 | 198.7 |
| | ハマグリ | 1,360.1 | 20.4% | 64 | 396.2 | 6.2 | 188.0 | 67 | 443.4 | 6.6 | 209.3 | 123.2 |
| | カキ | 111.4 | 1.7% | | | | | | | | | |
| | サザエ | 51.7 | 0.8% | | | | | | | | | |
| | ヨコイトカケギリガイ | 25.4 | 0.4% | | | | | | | | | |
| | その他 | 501.4 | 7.5% | | | | | | | | | |
| 総計 | | 6,657.9 | | | | | | | | | | |
| A1下層 | ハイガイ | 1,338.5 | 71.3% | 271 | 596.3 | 2.2 | 27.0 | 294 | 665.7 | 2.3 | 21.1 | 28.4 |
| (27.2m以下) | オキシジミ | 205.2 | 10.9% | 15 | 40.7 | 2.7 | 40.6 | 19 | 51.9 | 2.7 | 46.1 | 25.9 |
| | ハマグリ | 191.3 | 10.2% | 8 | 64.9 | 8.1 | 26.5 | 12 | 86.6 | 7.2 | 7.5 | 5.8 |
| | カキ | 5.2 | 0.3% | | | | | | | | | |
| | サザエ | 29.1 | 1.6% | | | | | | | | | |
| | ヨコイトカケギリガイ | 5.0 | 0.3% | | | | | | | | | |
| | その他 | 102.2 | 5.4% | | | | | | | | | |
| 総計 | | 1,876.5 | | | | | | | | | | |
| A1全体 | ハイガイ | 5,036.7 | 59.0% | 1,015 | 2,132.9 | 2.1 | 175.2 | 1,126 | 2,343.8 | 2.1 | 188.7 | 196.1 |
| | オキシジミ | 1,114.9 | 13.1% | 66 | 184.8 | 2.8 | 272.9 | 77 | 206.5 | 2.7 | 226.1 | 224.6 |
| | ハマグリ | 1,551.4 | 18.2% | 72 | 461.1 | 6.4 | 214.5 | 79 | 530.0 | 6.7 | 216.8 | 129.0 |
| | カキ | 116.6 | 1.4% | | | | | | | | | |
| | サザエ | 80.8 | 0.9% | | | | | | | | | |
| | ヨコイトカケギリガイ | 30.4 | 0.4% | | | | | | | | | |
| | その他 | 603.6 | 7.1% | | | | | | | | | |
| 総計 | | 8,534.4 | | | | | | | | | | |

第10表　A2の種類別貝殻重量

| A2貝殻重量 | | 総重量 | 比率 | 右　側 計測可能 個体数 | 右　側 計測可能 重量(g) | 右　側 計測可能 平均(g) | 右　側 計測不可能 重量(g) | 左　側 計測可能 個体数 | 左　側 計測可能 重量(g) | 左　側 計測可能 平均(g) | 左　側 計測不可能 重量(g) | 左右識別不能 重量(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A2上層 | ハイガイ | 2,624.2 | 78.4% | 579 | 1,036.3 | 1.8 | 211.6 | 573 | 1,132.5 | 2.0 | 167.3 | 76.5 |
| (27.2m以上) | オキシジミ | 285.4 | 8.5% | 18 | 50.1 | 2.8 | 56.3 | 11 | 27.2 | 2.5 | 54.7 | 97.1 |
| | ハマグリ | 202.6 | 6.1% | 3 | 10.4 | 3.5 | 59.8 | 3 | 29.5 | 9.8 | 88.8 | 14.1 |
| | カキ | 30.2 | 0.9% | | | | | | | | | |
| | サザエ | | | | | | | | | | | |
| | ヨコイトカケギリガイ | 15.2 | 0.5% | | | | | | | | | |
| | その他 | 190.3 | 5.7% | | | | | | | | | |
| 総計 | | 3,347.9 | | | | | | | | | | |
| A2下層 | ハイガイ | 218.2 | 87.3% | 45 | 70.8 | 1.6 | 26.1 | 55 | 82.3 | 1.5 | 18.6 | 20.4 |
| (27.2m以下) | オキシジミ | 9.5 | 3.8% | | | | 2.7 | | | | 3.8 | 3.0 |
| | ハマグリ | | | | | | | | | | | |
| | カキ | 5.5 | 2.2% | | | | | | | | | |
| | サザエ | | | | | | | | | | | |
| | ヨコイトカケギリガイ | 0.6 | 0.2% | | | | | | | | | |
| | その他 | 16.0 | 6.4% | | | | | | | | | |
| 総計 | | 249.8 | | | | | | | | | | |
| A2全体 | ハイガイ | 2,842.4 | 79.0% | 624 | 1,107.1 | 1.8 | 237.7 | 628 | 1,214.8 | 1.9 | 185.9 | 96.9 |
| | オキシジミ | 294.9 | 8.2% | 18 | 50.1 | 2.8 | 59.0 | 11 | 27.2 | 2.5 | 58.5 | 100.1 |
| | ハマグリ | 202.6 | 5.6% | 3 | 10.4 | 3.5 | 59.8 | 3 | 29.5 | 9.8 | 88.8 | 14.1 |
| | カキ | 35.7 | 1.0% | | | | | | | | | |
| | サザエ | | | | | | | | | | | |
| | ヨコイトカケギリガイ | 15.8 | 0.4% | | | | | | | | | |
| | その他 | 206.3 | 5.7% | | | | | | | | | |
| 総計 | | 3,597.7 | | | | | | | | | | |

貝殻の大きさとして殻長、殻高、厚さ、そして貝殻の重量、小グリッド以外から一括して採取した貝殻については、全体の重量のみを量った。

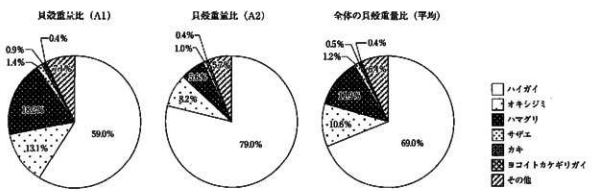
**分析結果・重量**　A1の貝殻の総重量は8,534.4ｇであった（第９表）。標高27.20ｍを境界にして上層と下層に分離すると、上層ではハイガイの重量が全体の55.5％を占め、下層では71.3％であった。ハマグリの重量は上層で20.4％、下層で10.2％であった。上層でハマグリの占める割合が増加している。オキシジミの占める割合も上層でやや増加した。カキについても、下層よりも上層で岩干割合が増えている。上層、下層ともにハイガイが主体であるが、上層になるとハイガイの割合が減少し、代わってオキシジミ、ハマグリの割合が増え、ややバラエティに富んだ構成である。

貝殻１枚の平均重量は、ハイガイ2.1ｇ、オキシジミ2.7ｇ、ハマグリ6.5ｇであった。カキの貝殻は破砕していたので、個体数を確定することが不可能であった。サザエは３個あったが、いずれも小さい個体で、そのなかの大きいものでも殻高が72.9㎜、重量が43.7ｇしかなかった。ヨコイトカケギリガイの重量は１ｇ前後で、大きさは殻高が30.0㎜以下であった。

A2の貝殻の総重量は3,597.7ｇで（第10表）、A1よりも堆積層が浅かったために重量も少量であった。A2でも標高27.20ｍを境界にして上層と下層に分離してみたが、A1ほどの上下の差異は見られなかった。上層でオキシジミやハマグリの占める割合がわずかにあるものの、上下ともにハイガイが大半を占め、ハイガイの単純層に近いといえるだろう。二枚貝以外のカキ、サザエ、ヨコイトカケギリガイはほとんど含

第11表　貝殻の重量と比率

| | A1 | | A2 | | 全体平均 | サンプル外重量（ｇ） | 全体重量（総計） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 重量（ｇ） | 比率 | 重量（ｇ） | 比率 | | | |
| ハイガイ | 5,036.7 | 59.0% | 2,842.4 | 79.0% | 69.0% | | 12,084.6 |
| オキシジミ | 1,114.9 | 13.1% | 294.9 | 8.2% | 10.6% | | 2,057.6 |
| ハマグリ | 1,551.4 | 18.2% | 202.6 | 5.6% | 11.9% | | 2,479.5 |
| サザエ | 116.6 | 1.4% | 35.7 | 1.0% | 1.2% | | 224.2 |
| カキ | 80.8 | 0.9% | | | 0.5% | | 109.6 |
| ヨコイトカケギリガイ | 30.4 | 0.4% | 15.8 | 0.4% | 0.4% | | 70.4 |
| その他 | 603.6 | 7.1% | 206.3 | 5.7% | 6.4% | | 1,200.1 |
| 総計 | 8,534.4 | | 3,597.7 | | | 6,094.0 | 18,226.1 |




第36図　貝殻重量比

まれていない。貝殻1枚の平均重量をみると、A2のハイガイは2g以下となり、A1の平均重量よりも軽い。

A1とA2を全体的に比較すると（第11表）、A1ではハイガイが59.0%、オキシジミ13.1%、ハマグリ18.2%で、ハイガイを主体に、オキシジミとハマグリなど他の種類の貝も混入していた。一方A2では、ハイガイが約8割を占め、他の貝の種類で1割を超えるものはなかった。A1とA2でハイガイの含まれる割合の平均を算出すると、全体の割合は69.0%であった（第36図）。A1の貝殻総重量は8,534.4g、A2は3,597.7gで、小グリッド以外の貝殻総重量は6,094.0gであった。したがって006炉穴に堆積していた貝殻全体の総重量は約18kgとなり、そのうち約7割がハイガイであり、ハイガイの総重量約12kgと推計される。同じように計算するとハマグリは2kg、オキシジミは2.5kgと推計される。

A1とA2をあわせた貝殻1枚の平均重量は、ハイガイ2.0g、オキシジミ2.7g、ハマグリ6.6gであった。貝殻1枚の平均重量を2倍した数値を二枚貝1個体の貝殻重量とすると、1個体のそれぞれの重量はハイガイ4.0g、オキシジミ5.4g、ハマグリ13.2gとなる。上記に算出した二枚貝各種の総重量を、この二枚貝1個体の平均重量で除すると全体個体数の推計値となり、ハイガイ3,016個、オキシジミ378個、ハマグリ189個となる。

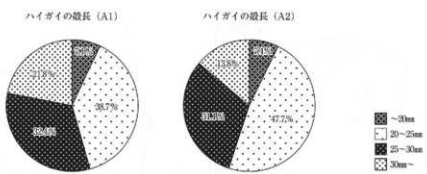
**殻長**　次に貝殻の大きさ、特に二枚貝の殻長を見てみてみると（第12表）、ハイガイは、20～25mmの貝殻が最も多い。さらにA1とA2を比較すると、A2では20～25mmの貝殻が半数近くをしめていた。A1では30mm以上の貝殻が2割ほどあるが、A2では約1割しかない（第37図）。成長したハイガイの殻長は5cmほどあることから、30mm以下のものは小型の部類に属する。つまり採取されたハイガイは全般的に小型であったが、とくにA2ではその傾向が顕著であった。また、A2の貝の種類が、ほぼハイガイの単独的な構成になっていることを考え合せると、A2は小型ハイガイに特化した堆積だったといえるだろう。A1はハイガイと他の貝類をまじえて形成され、A2は小型ハイガイが主体であった。

出土したハイガイの大きさは小型であったが、同じ傾向は、オキシジミとハマグリにも認められる。オキシジミの成長した殻長は、約4.5cmあるいは5cmであり、今回調査で出土したオキシジミの中で、殻長が40mm以上のものは約1割しかなかった。同様にハマグリの殻長は約8.5cmで、出土したハマグリの中で、殻長が50mm以上のものは約2割で、60mm以上のものはわずかに5個、全体の3パーセントにすぎず、出土した二枚貝の貝殻は、いずれの種類も小型であった。サザエも小型であったことから、さほど大きく成長していない比較的小粒の貝を食していた。

A1とA2の貝殻の構成要素が等質ではなくて差違がみられること、さらに貝層上面の形状が、瓢箪形であることから、貝層の堆積は一時に形成されたのではなく、複数回にわたって形成されたと予想される。この貝殻構成は、そのまま食の傾向も示すと考えられる。A1ではハイガイと、少しではあるが他の貝類も混じえていた。一方A2では、ほとんど小型ハイガイであった。小型ハイガイに特化した原因は、海岸で小型ハイガイだけを選んで採取したのではなく、ハイガイを採取する際に、概して小型のものしかなかったためであろう。他の貝をしりぞけて意識的にハイガイを採取したのか、あるいは海岸の生態系自体がハイガイを主体とする自然条件だったのかという点に関しては不明である。

第12表　二枚貝の大きさ

| | 殻長 | | ～20mm | | 20～25mm | | 25～30mm | | 30mm～ | | 総数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ハイガイ | A1上層(27.2m以上) | 右 | 56 | 7.5% | 288 | 38.7% | 234 | 31.5% | 166 | 22.3% | 744 |
| | | 左 | 65 | 7.8% | 344 | 41.3% | 265 | 31.9% | 158 | 19.0% | 832 |
| | A1下層(27.2m以下) | 右 | 15 | 5.5% | 97 | 35.8% | 89 | 32.8% | 70 | 25.8% | 271 |
| | | 左 | 17 | 5.8% | 99 | 33.7% | 105 | 35.7% | 73 | 24.8% | 294 |
| | A1全体 | | 153 | 7.1% | 828 | 38.7% | 693 | 32.4% | 467 | 21.8% | 2,141 |
| | A2上層(27.2m以上) | 右 | 42 | 7.3% | 284 | 49.1% | 174 | 30.1% | 79 | 13.6% | 579 |
| | | 左 | 43 | 7.5% | 255 | 44.5% | 194 | 33.9% | 81 | 14.1% | 573 |
| | A2下層(27.2m以下) | 右 | 2 | 4.4% | 27 | 60.0% | 9 | 20.0% | 7 | 15.6% | 45 |
| | | 左 | 6 | 10.9% | 31 | 56.4% | 12 | 21.8% | 6 | 10.9% | 552 |
| | A2全体 | | 93 | 7.4% | 597 | 47.7% | 389 | 31.1% | 173 | 13.8% | 1,252 |
| オキシジミ | 殻長 | | ～30mm | | 30～35mm | | 35～40mm | | 40mm～ | | 総数 |
| | A1上層(27.2m以上) | 右 | 5 | 9.8% | 17 | 33.3% | 25 | 49.0% | 4 | 7.8% | 51 |
| | | 左 | 10 | 17.2% | 22 | 37.9% | 21 | 36.2% | 5 | 8.6% | 58 |
| | A1下層(27.2m以下) | 右 | 2 | 13.3% | 5 | 33.3% | 6 | 40.0% | 2 | 13.3% | 15 |
| | | 左 | 2 | 10.5% | 5 | 26.3% | 9 | 47.4% | 3 | 15.8% | 19 |
| | A1全体 | | 19 | 13.3% | 49 | 34.3% | 61 | 42.7% | 14 | 9.8% | 143 |
| | A2上層(27.2m以上) | 右 | 3 | 16.7% | 5 | 27.8% | 7 | 38.9% | 3 | 16.7% | 18 |
| | | 左 | 0 | 0.0% | 9 | 81.8% | 2 | 18.2% | 0 | 0.0% | 11 |
| | A2全体 | | 3 | 10.3% | 14 | 48.3% | 9 | 31.0% | 3 | 10.3% | 29 |
| ハマグリ | 殻長 | | ～40mm | | 40～45mm | | 45～50mm | | 50mm～ | | 総数 |
| | A1上層(27.2m以上) | 右 | 24 | 37.5% | 25 | 39.1% | 3 | 4.7% | 12 | 18.8% | 64 |
| | | 左 | 27 | 40.3% | 16 | 23.9% | 10 | 14.9% | 14 | 20.9% | 67 |
| | A1下層(27.2m以下) | 右 | 3 | 37.5% | 0 | 0.0% | 1 | 12.5% | 4 | 50.0% | 8 |
| | | 左 | 2 | 16.7% | 3 | 25.0% | 3 | 25.0% | 4 | 33.3% | 12 |
| | A1全体 | | 56 | 37.1% | 44 | 29.1% | 17 | 11.3% | 34 | 22.5% | 151 |
| | A2上層(27.2m以上) | 右 | 2 | 66.7% | 1 | 33.3% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 3 |
| | | 左 | 1 | 33.3% | 0 | 0.0% | 1 | 33.3% | 1 | 33.3% | 3 |
| | A2全体 | | 3 | 50.0% | 1 | 16.7% | 1 | 16.7% | 1 | 16.7% | 6 |




第37図　ハイガイの殻長

## 第２節　平安時代

平安時代の遺構は、住居跡４軒と遺物包含層１か所であった。台地先端部の縁辺に住居跡が分布し、縁辺から谷部へと傾斜し始める地点に遺物包含層があったことから、調査区外東側の台地中央部にも平安時代の住居跡が分布する可能性が高いと考えられる。

### １　住居跡

いずれも比較的小型でほぼ同じ規模の住居跡が、４軒検出された。

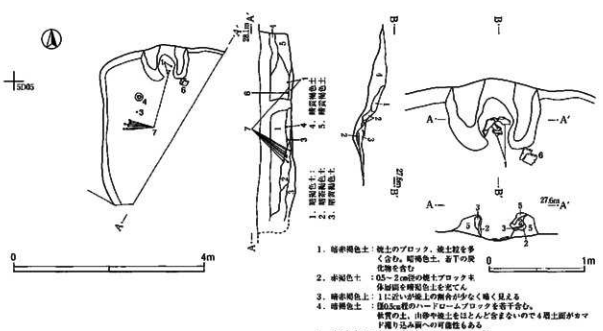
**001住居跡**（第38図、図版12）

調査区東南、4D95～97・5D05～06・5D15～16に位置する。東南部1/2は調査区域外となり、西側のみを調査した。遺構全体を調査できなかったので、住居跡の正確な規模を把握できなかったが、長軸約3.3m、短軸約３mの規模と推定される。壁の深さは約75cmであった。北側にカマドがあり、住居跡の主軸方位はN－7°－Wである。柱穴および周溝は検出されなかった。

カマドが北壁から検出され、ソデ部は山砂と暗褐色土の混合土であった。右側ソデ部の前面から甑の破片が出土したほか、多数の土器片が、カマド周辺および前面の覆土中、床面から出土した。

**出土遺物**（第41図、図版17）

出土遺物のほとんどは土師器片だった。図示できたのは７個体である。001－1と001－2は土師器の皿で、001－1の口径が14.5cm、001－2の口径が15.0cmで、ともに器高は2.9cmで、ほぼ同じ大きさであった。001－4はほぼ完形の須恵器の高台付杯で、覆土中下層から出土した。001－5は土師器の椀で、口径が21.0cmである。001－6と001－7はともに土師質須恵器で、001－6は甑、001－7は甕であった。両者ともに外面胴部にタタキ目、外面下部にヘラケズリ調整痕があり、底径はほぼ同じであった。




第38図　001住居跡

**002住居跡**（第39図、図版12）

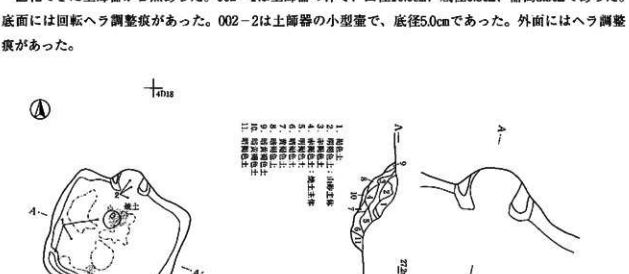
調査区東端の4D17・4D26～28・4D37～38に位置する。短軸2.5m、長軸2.8mの長方形であった。壁の深さは約50cmであった。北壁のほぼ中央にカマドがあり、住居跡の主軸方位はN－24°－Eである。南西コーナーに短い周溝がめぐっていた。カマド前面に深さ約40cmのピットがあったが、カマド前面に柱が立っていたとは考えられないので、このピットを柱穴と解釈できない。性格不明の小ピットである。住居内西側の床面で踏み固められた硬化面が検出された。カマド前面および南壁付近中央の2か所に焼土が分布していた。

北壁中央やや西側からカマドが検出された。遺存状態は悪く、一部のソデ部が残っているだけで、火床部も赤く硬化した面がうすかった。さほど使用されなかったカマドと思われる。

覆土中から土器片が出土した。

**出土遺物**（第41図、図版17）

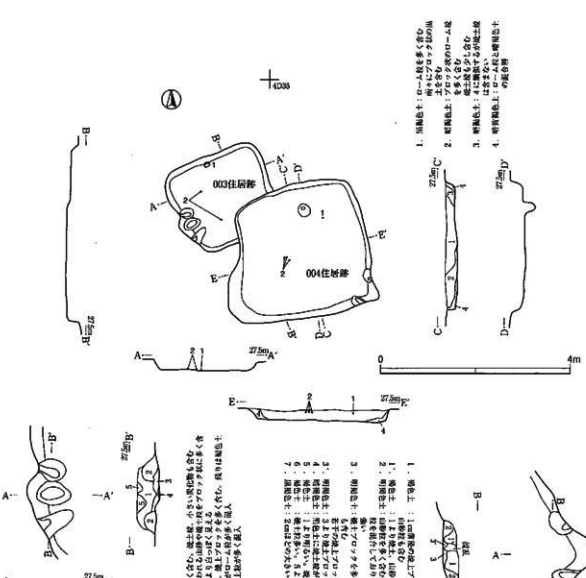
図化できた土師器が2点あった。002－1は土師器の杯で、口径10.6cm、底径6.8cm、器高3.8cmであった。底面には回転ヘラ調整痕があった。002－2は土師器の小型壺で、底径5.0cmであった。外面にはヘラ調整痕があった。




第39図　002住居跡

**003住居跡**（第40図、図版13）

調査区中央やや東南より、4D34・4D43～45に位置し、東南隅を004住居跡と重複している。長軸2.2m、短軸1.9mの長方形で、壁の深さは約20cmであった。西壁南側にカマドがあり、住居跡の主軸方位はN－114°－Wであった。柱穴および周溝は検出されなかった。003住居跡と004住居跡との前後関係ついては、判断が非常に困難であったが、一応003住居跡が新しいと考えられる。



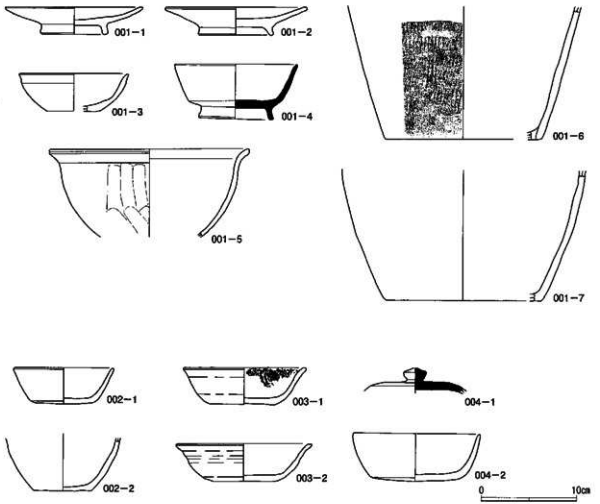

第40図　003・004住居跡

カマドが西壁南側から検出された。ソデ部は山砂で構築されていた。

覆土中から少量の土器片が出土した。

**出土遺物**（第41図、図版17）

図化できた土師器が2点あった。003－1は完形の土師器の杯で、北壁中央の床直上から出土した。口径13.0cm、底径6.8cm、器高4.9cmであった。底面には回転糸切り離し痕があった。内面口縁には油煙が顕著に付着していた。003－2は土師器の杯で、口径14.4cm、底径6.5、器高4.9cmであった。ロクロ成形で、底




第41図　住居跡出土の土器

面および外面下部には回転ヘラ調整痕があった。

**004住居跡**（第40図、図版13）

調査区中央やや東南より、4D44～45・4D54～55に位置し、西北隅を003住居跡と重複している。1辺2.8mの正方形で、壁の深さは約20cmであった。東南隅にカマドがあり、住居跡の主軸方位はN－82°－Eであった。北壁付近の中央に、深さ約25cmの柱穴があった。

カマドは東南隅から検出された。ソデ部は山砂で構築されていた。

覆土中から少量の土器片が出土した。

**出土遺物**（第41図、図版17）

図化できた土器が2点。004－1は須恵器の蓋である。004－2は土師器の杯で、口径13.4cm、底径9.5cm、器高5.0cmであった。外面に細かいヘラ調整痕があった。

4軒の住居跡から出土した土器はほぼ同時期の様相をしめし、平安時代初期の9世紀中頃の土器と考えられる。

## 2　遺物包含層

平安時代の遺物包含層が調査区西側に広がっていた。台地縁辺から斜面へと緩斜し始める付近で、長軸約15m、短軸約9.5mの範囲に約90点の遺物が分布していた。遺物はおもに土器片だったが、少量の石器も出土した。出土層位はローム層上面の黒褐色土、暗黄褐色土、暗褐色土で、土層層位の厚さは20～40cmであった。

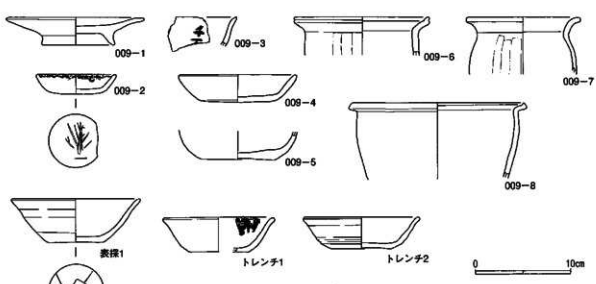
遺物包含層は、台地上の住居跡とは少し離れた場所にあり、住居跡との関連性はうかがえない。出土した土器片はいずれも破片で、完形品はなかった。遺物包含層の性格は不明瞭であるが、台地上の住居から投棄されたことにより形成された可能性がある。

**出土遺物**（第42図、図版18）

図化できた土器は８点。009－1は土師器の皿で、口径14.5cm、底径7.7cm、器高2.9cmであった。009－2は土師器の灯明皿で、口縁に油煙が付着し、底面には木葉の線刻があった。009－3は土師器の杯口縁で、墨書土器である。「千」の字の下にもう１文字あるが、上半分だけで欠損しており「百」の文字の上部かもしれない。009－4は土師器の杯で、口径12.5cm、底径8.2cm、器高2.9cmであった。009－6と009－7は土師器の小型甕で、口径がそれぞれ14.2cm、12.1cmであった。009－8は土師器の鉢で、口径が18.8cmであった。

表採、およびトレンチから出土した土器についても、記載しておく。表採１は土師器の杯で、口径13.6cm、底径5.7cm、器高4.6cmであり、底面に線刻があった。トレンチ１は土師器の杯で、口径11.8cm、底径6.3cm、器高3.7cmであった。口縁に油煙が付着していた。トレンチ２は土師器の杯で、口径12.0cm、底径6.4cm、器高3.3cmであった。

遺物包含層の土師器、表採、トレンチ出土の土師器は、住居跡出土の土師器と同様に９世紀中頃の土器と考えられる。




第42図　平安時代の土器

第13表　広台遺跡の平安時代土器一覧表

| 遺　構 | 挿図番号 | 種　別 | 器　種 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 色　調 | 焼　成 | 調　整 | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 001住居跡 | 001－1 | 土師器 | 皿 | 14.5 | 7.1 | 2.9 | 明茶褐色 | 良好 | | 1/4 | |
| 001住居跡 | 001－2 | 土師器 | 皿 | 15.0 | 8.0 | 2.9 | 明茶褐色 | 良好 | | 1/5 | |
| 001住居跡 | 001－3 | 土師器 | 杯 | 11.5 | 5.3 | 4.0 | 明茶褐色 | 良好 | | 1/8 | |
| 001住居跡 | 001－4 | 須恵器 | 高台付杯 | 13.0 | 8.0 | 6.3 | 青灰褐色 | 良好 | 底部回転ヘラ調整 | ほぼ完形 | |
| 001住居跡 | 001－5 | 土師器 | 椀 | 21.0 | — | — | 外面赤茶褐色、内面黒褐色 | 良好 | | 1/8 | |
| 001住居跡 | 001－6 | 土師質須恵器 | 甕 | — | 16.5 | — | 灰茶褐色 | やや良好 | 外面胴部タタキ、内面下部ヘラケズリ、内面ナデ | 1/7 | |
| 001住居跡 | 001－7 | 土師質須恵器 | 甕 | — | 16.4 | — | 灰茶褐色 | やや良好 | 外面胴部タタキ、外面下部ヘラケズリ、内面ナデ | 1/7 | |
| 002住居跡 | 002－1 | 土師器 | 杯 | 10.6 | 6.8 | 3.8 | 明茶褐色 | 良好 | 底面回転ヘラ調整 | 1/4 | |
| 002住居跡 | 002－2 | 土師器 | 小型壺 | — | 5.0 | — | 明茶褐色 | 良好 | | 1/8 | |
| 003住居跡 | 003－1 | 土師器 | 杯 | 13.0 | 6.8 | 4.9 | 明茶褐色 | 良好 | 底部外面ナ部回転ヘラ調整 | 完形 | 回転糸切り痕し、内面に漆塗 |
| 003住居跡 | 003－2 | 土師器 | 杯 | 14.4 | 6.5 | 4.9 | 明茶褐色 | 良好 | 底面外面下部回転ヘラ調整 | 1/4 | |
| 004住居跡 | 004－1 | 須恵器 | 蓋 | — | — | — | 暗灰褐色 | 良好 | | 1/4 | |
| 004住居跡 | 004－2 | 土師器 | 杯 | 13.4 | 9.5 | 5.0 | 内面赤茶褐色、外面暗褐色 | 良好 | 外面横かいヘラ調整、内面ナデ | 4/5 | |
| 遺物包含層 | 009－1 | 土師器 | 皿 | 14.5 | 7.7 | 2.9 | 明茶褐色 | やや良好 | 回転糸切痕、回転ヘラ調整 | 1/4 | |
| 遺物包含層 | 009－2 | 土師器 | 灯明皿 | 8.4 | 5.9 | 2.1 | 明褐色 | 良好 | 内面ナデ、外面ヘラ調整 | 1/3 | 口縁部に油煙、底面に木葉痕跡 |
| 遺物包含層 | 009－3 | 土師器 | 杯口縁 | | | | | | | | 墨書「下百？」 |
| 遺物包含層 | 009－4 | 土師器 | 杯 | 12.5 | 8.2 | 2.9 | 明茶褐色 | やや良好 | | 1/4 | |
| 遺物包含層 | 009－5 | 土師器 | 杯 | — | 7.9 | — | 明茶褐色 | 良好 | 底面回転ヘラ調整 | 1/3 | |
| 遺物包含層 | 009－6 | 土師器 | 小型壺 | 14.2 | — | — | 暗褐色 | 良好 | 外面ヘラケズリ、内面ナデ、口縁ヨコナデ | 1/8 | |
| 遺物包含層 | 009－7 | 土師器 | 小型壺 | 12.1 | — | — | 外面赤茶褐色、内面黒褐色 | 良好 | 外面ヘラケズリ、内面ナデ、口縁ヨコナデ | 1/8 | |
| 遺物包含層 | 009－8 | 土師器 | 鉢 | 18.8 | — | — | 茶褐色 | 良好 | 外面ヘラケズリ、内面ナデ、口縁ヨコナデ | 1/10 | |
| 表採 | 表採1 | 土師器 | 杯 | 13.6 | 5.7 | 4.6 | 明茶褐色、口縁部黒褐色 | 良好 | 底部ヘラ調整 | 1/6 | 底面に糸痕 |
| トレンチ | トレンチ1 | 土師器 | 杯 | 11.8 | 6.3 | 3.7 | 明茶褐色 | 良好 | 底部回転ヘラ調整 | 1/8 | 口縁内面に油煙 |
| トレンチ | トレンチ2 | 土師器 | 杯 | 12.0 | 6.4 | 3.3 | 明茶褐色 | 良好 | 底部回転ヘラ調整 | 1/6 | |

# 第4章　まとめ

**六反目遺跡**　弥生時代後期の住居跡、中近世の土坑と溝、近世の塚が検出された。

印旛村では、萩原永原遺跡で弥生時代後期の住居跡が19軒検出された[1]。また平賀仲ノ台遺跡、平賀井ノ崎台遺跡などでも完形に近い弥生時代後期の土器が出土している。これらの遺跡は印旛沼北部を中心に分布している。今回の調査で弥生時代後期の住居跡が1軒検出され、印旛沼北部一帯で弥生時代集落が展開していたことを確認できた。細長い調査範囲であったために、1軒しか住居跡を検出できなかったが、遺跡周辺には同時代の住居跡が広がっていると考えられる。

中近世の土坑は火葬墓、そして溝は道路と考えられる。これら中近世の遺構および近世の塚は、岩戸地区郷出集落の北側に接して分布しており、集落縁辺に設けられた道路や墓とみられる。

**広台遺跡**　縄文時代早期の炉穴に、ハイガイを中心に貝殻が堆積していた。また、9世紀中頃の平安時代の住居跡が検出された。今回調査した地点の同一台地上南側を、印旛郡市文化財センターが調査している[2]。その時の調査でも、縄文時代早期の住居跡、炉穴、土坑と、古墳時代から平安時代までの住居跡が検出された。

ハイガイは、内湾奥の泥質干潟に生息し、かつて東京湾以南の閉鎖性の内湾に広く分布していた。現在は瀬戸内海のごく一部と有明海でのみ生息が確認され、稀少生物になっているという。ハイガイは世界的には東南アジア、インドに広く分布している。日本では高度経済成長時代に、多くの内湾干潟が埋め立てられて港湾となり、貝の生息する環境が激減した。干潟の全国的減少とともに、ハイガイの分布もきわめて狭い範囲に縮小してしまった。現在では関東地方でハイガイが見ることができないが、縄文時代早期の貝塚からハイガイの貝殻が出土する例が多く、縄文時代にハイガイの食用は普遍的であったと思われる。

006炉穴から出土した貝殻の総重量は約18kgであった。貝の全体重量を可食部と貝殻にわけ、可食部の重量を貝殻の約3分の1とすると、貝全体の重量は貝殻の重量の3分の4倍になる。すなわち重量約18kgの貝殻は、可食部もふくめると、貝全体で約24kgの重量であったと復元できる。現在市場で販売されている事例を見ると、たとえばハマグリ（小型）1kgで約50個の貝が含まれていた。1個の貝の重量が20g、そのうち可食部が5g、殻が15gとなり、貝殻1枚の重さは7.5gと計算される。今回の調査で出土したハマグリの貝殻1枚の平均重量は6.6gであったが、可食部を含めた1kgに含まれる個体数は約57個と推計される。

広台遺跡の東側約1kmの地点、同一台地の東縁辺に船作第1遺跡（石神台貝塚）がある。この遺跡は縄文時代後期の加曽利B式を主体とする貝塚で、サンプル調査により、貝層はヤマトシジミが大半を占めている。また、広台遺跡の東側約2kmに位置する戸ノ内遺跡も、縄文時代後期末の安行式を中心とする貝塚で、ムラサキガイとヤマトシジミが主体である[3]。ヤマトシジミは海水の影響のある河口や汽水域に生息する。ムラサキガイは潮間帯より水深20m前後までの砂底に深く潜って生息している。船作第1遺跡や戸ノ内遺跡の縄文人は、広台遺跡の縄文人と同じような水域の貝を採取していた。しかしながら貝層の堆積量はかなり相違し、広台遺跡の貝殻は相対的に少量である。生活パターンそのものが質的に異なっていたと推測される。

また、前回の台地南側の調査でも縄文時代早期の生活痕跡が確認されたので、縄文人の生活圏が台地全体に広がっていたといえる。

広台遺跡で検出された平安時代の住居跡に関して考えてみると、同一台地上で以前調査を行った印旛郡市文化財センターの調査結果では、7世紀後半から10世紀初頭にかけて集落が存続し、土器の形態からⅠ～Ⅴ期の時期が想定された。今回出土した土師器は、そのなかのⅣ期に相当し、それ以外の時期の土師器は出土しなかった。つまり9世紀中頃ないし後半の時期に、台地南側の集落が一時的に短期間北側まで拡大したと考えられる。

註1　『萩原長原遺跡・猪谷塚群』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第162集、2000年。

2　斉藤毅他『岩戸広台遺跡A地区・B地区発掘調査報告書』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第17集、1988年。

3　古内茂・三浦和信編『石神台貝塚・戸ノ内貝塚』印旛村村史編纂委員会、1984年。

# 写真図版

遺跡周辺航空写真（1957年）

図版2

隙作遺跡調査前風景

隙作遺跡調査風景

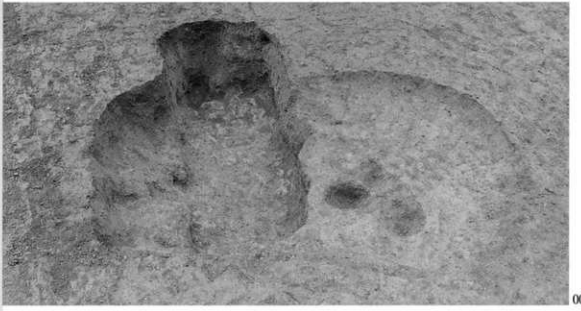
六反目遺跡調査前風景

001住居跡

002竪穴状遺構

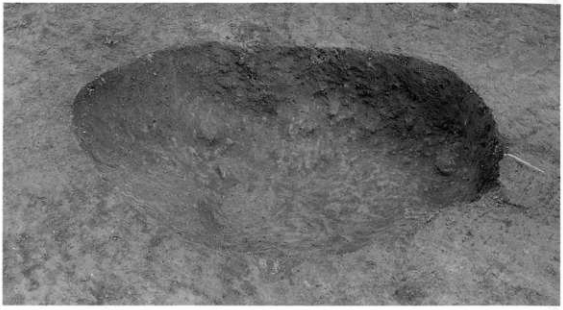
004土坑

004土坑と010溝



005土坑

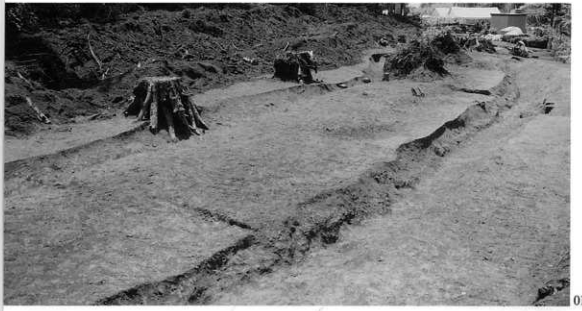
006土坑



007土坑

008土坑

011溝



010・011溝

012・016溝

013・015溝

012溝

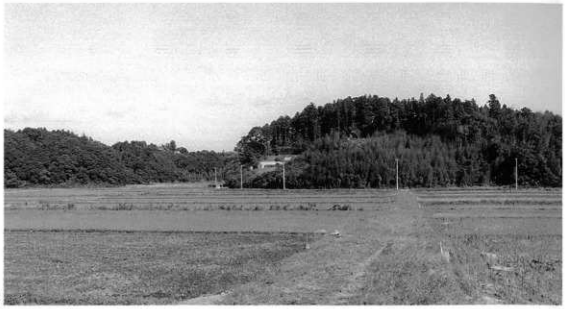
013・014・015溝

009塚調査前

009塚北西から

009塚北東から

009塚底部土坑



広台遺跡遠景

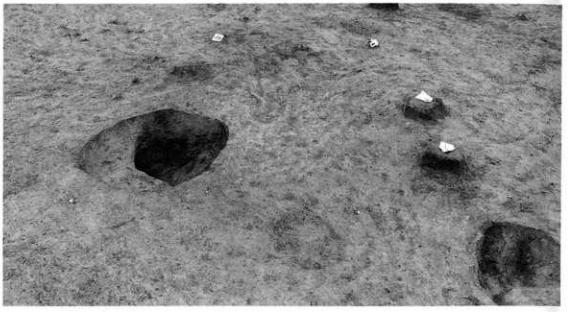
006炉穴貝層

006炉穴貝層出土状態

006炉穴土層断面

006炉穴

008炉穴



007土坑

縄文時代遺物包含層

縄文時代遺物包含層

001住居跡

001住居跡遺物出土状態

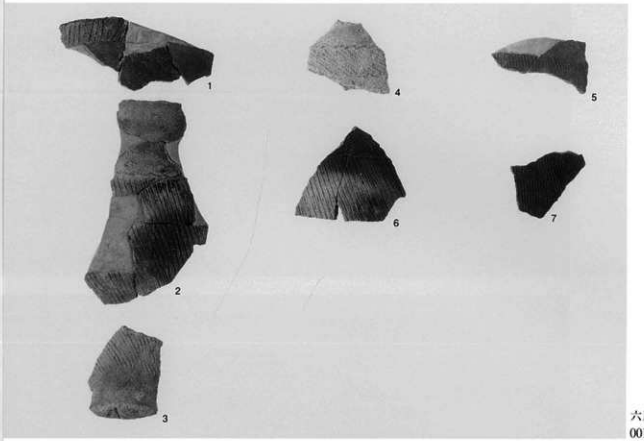
001住居跡カマド

002住居跡

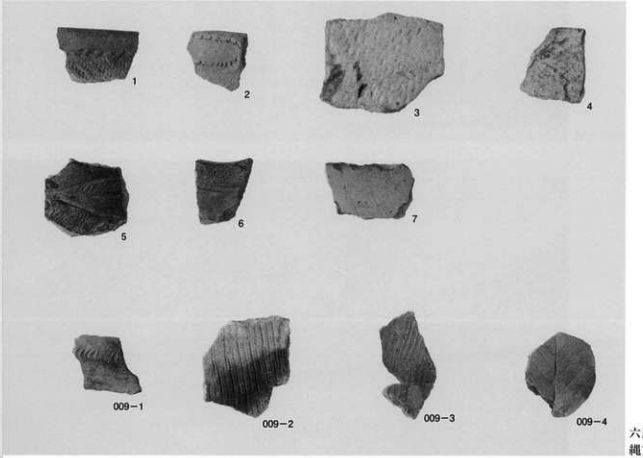
003・004住居跡

003・004住居跡

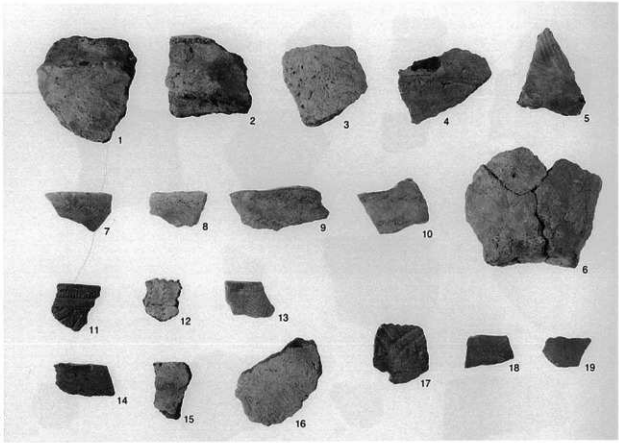
平安時代遺物包含層



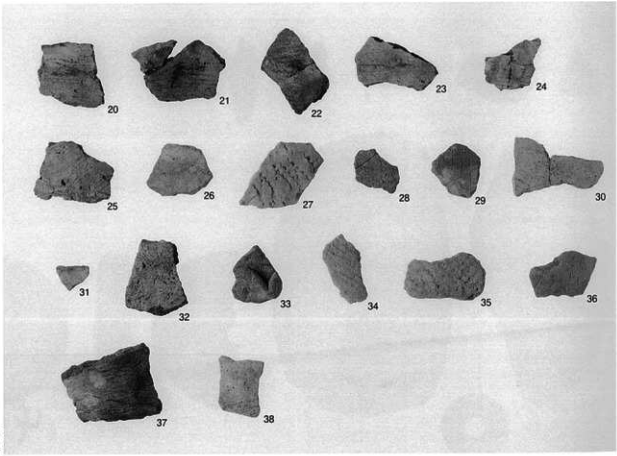

六反目遺跡
001住居跡遺物



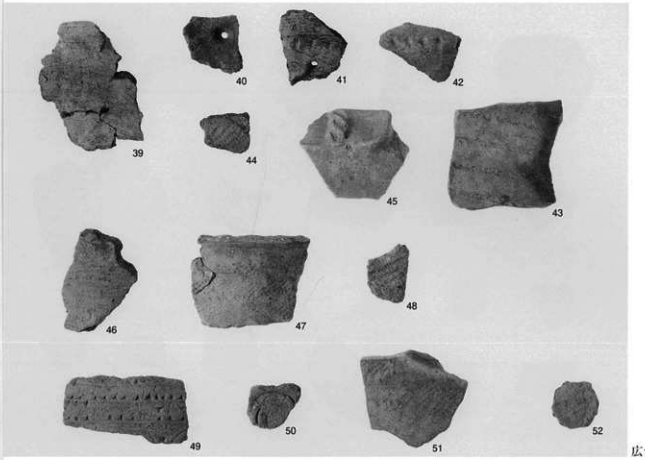

六反目遺跡遺物
縄文土器



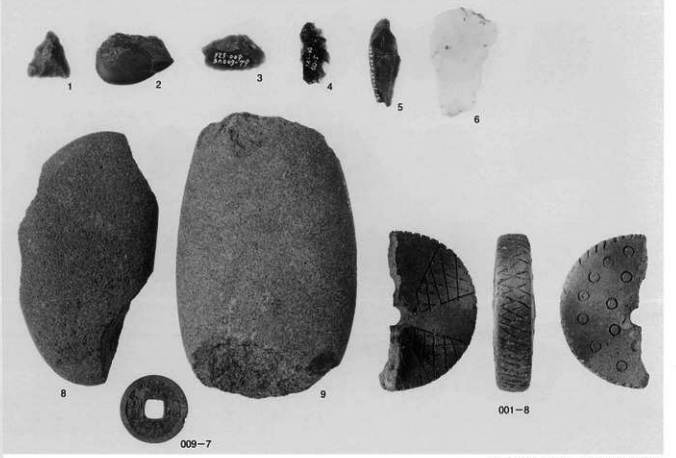

広台遺跡
縄文土器




広台遺跡
縄文土器

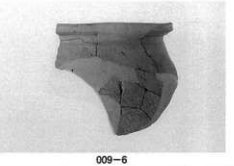



広台遺跡縄文土器




広台遺跡石器、六反目遺跡遺物

六反目遺跡009塚遺物


009－6

009－5

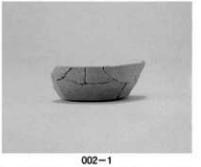
001－1

001－2

001－4

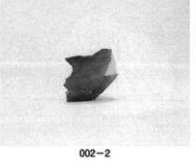
001－6

001－7


002－1

003－1

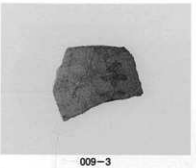
広台遺跡住居跡遺物


002－2

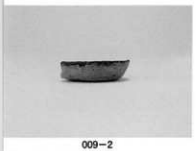
003－2

004－2

009−1


009−3

009−4

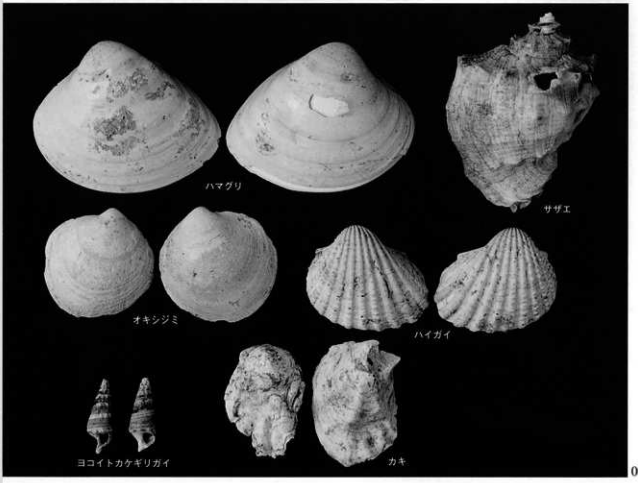

009−2

009−7

表採1

トレンチ2

広台遺跡遺物




006貝穴貝殻

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | いんばむらろくたんめいせき・ひろのだいいせき・きわさくいせき |
| 書名 | 印旛村六反目遺跡・広台遺跡・際作遺跡 |
| 副書名 | 住宅市街地基盤整備（県道263号八千代宗像線埋蔵文化財調査） |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 財団法人千葉県教育振興財団調査報告 |
| シリーズ番号 | 第617集 |
| 編著者名 | 森本和男 |
| 編集機関 | 財団法人　千葉県教育振興財団　文化財センター |
| 所在地 | 〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の2　TEL　043（424）4848 |
| 発行年月日 | 西暦2009年3月31日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 六反目遺跡 | 印旛郡印旛村<br>岩戸字西田<br>2971－3ほか | 325 | 008 | 35度<br>46分<br>11秒 | 140度<br>9分<br>57秒 | 20060703～<br>20061013 | 4,200㎡ | 住宅市街地基盤整備 |
| 広台遺跡 | 印旛郡印旛村<br>岩戸字広台<br>3847－6ほか | 325 | 009 | 35度<br>45分<br>59秒 | 140度<br>9分<br>44秒 | 20061016～<br>20061208 | 2,100㎡ | |
| 際作遺跡 | 印旛郡印旛村<br>岩戸字木戸尻<br>3247－6ほか | 325 | 007 | 35度<br>46分<br>27秒 | 140度<br>10分<br>26秒 | 20061211～<br>20061218<br>20070903～<br>20070914 | 780㎡<br>1,020㎡ | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 六反目遺跡 | 集落跡<br>墓地 | 弥生時代<br>中近世 | 住居跡１基<br>竪穴状遺構２基、<br>土坑５基、溝７条<br>塚１基 | 弥生土器<br><br>土師器 | 火葬墓および道路状遺構が検出された。 |
| 広台遺跡 | 集落 | 縄文時代<br><br>平安時代 | 炉穴２基<br>土坑２基<br>遺物包含層１ヶ所<br>住居跡４軒<br>遺物包含層１ヶ所 | 縄文土器<br>石器<br>貝殻<br>土師器 | 縄文時代早期の炉穴から貝殻が出土した。純鹹のハイガイが主体であった。 |


要約　印旛沼西部北岸の台地上に立地する３遺跡の調査報告書。際作遺跡は、以前の調査で石器や各時代の土器が出土していたが、今回の調査地区での確認調査では、遺構・遺物は検出されなかった。六反目遺跡は、弥生時代後期の住居跡が検出され、印旛沼西部における弥生時代集落の広がりが注目される。また、中近世の道路状遺構や火葬墓、塚が検出された。これらは、近世集落の周縁で展開された遺構と考えられる。広台遺跡は、縄文時代早期の炉穴や土坑、遺物包含層が検出された。炉穴の中に貝殻の堆積層があった。貝層は小規模で、貝塚を形成するほどではなかった。内湾に生息する純鹹のハイガイが主体であった。また、９世紀中頃の平安時代の住居跡が検出された。約20年前に広台遺跡の南側で調査が実施され、縄文時代早期の炉穴や遺物包含層、７世紀後半から10世紀初頭にかけての集落が検出されており、今回の調査から、台地上での集落の広がりがより明確化された。

千葉県教育振興財団調査報告第617集

印旛村六反日遺跡・広台遺跡・際作遺跡

―住宅市街地基盤整備（県道263号八千代宗像線埋蔵文化財調査）―

平成21年3月10日発行

編　集　財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　行　千葉県印旛地域整備センター
佐倉市鏑木仲田町8－1

財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印　刷　株式会社　正文社
千葉市中央区都町1－10－6